五稜

3

1964

函館市立五稜中学校
生徒会

第　参　号

五

稜

校　歌

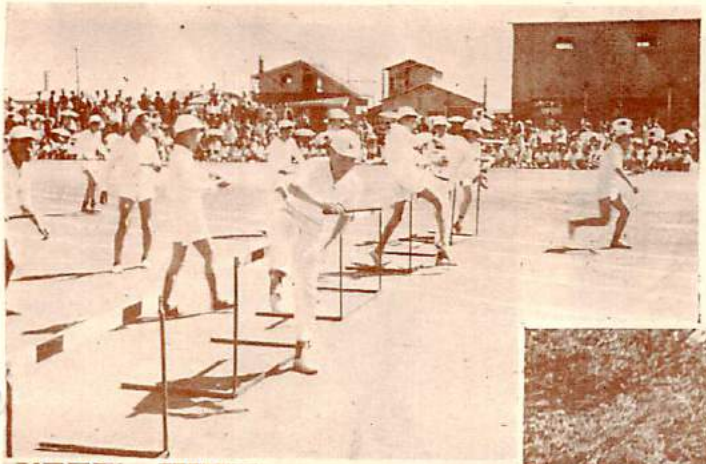
一、ひんがしに　古城いだきて
たたなわる　五稜が丘は
若人の　息吹きに満ちぬ
水上に　ふるきをたずね
新しき　光に立ちて
大いなる　力伸ばさん

二、さくら花　しるしと仰ぎ
友がきの　堅く結びて
うち鳴らす　自主の鐘の音
ひとすじに　まことを踏め
築きゆく　理想のすがた
ああ　とわに　われら栄えあれ

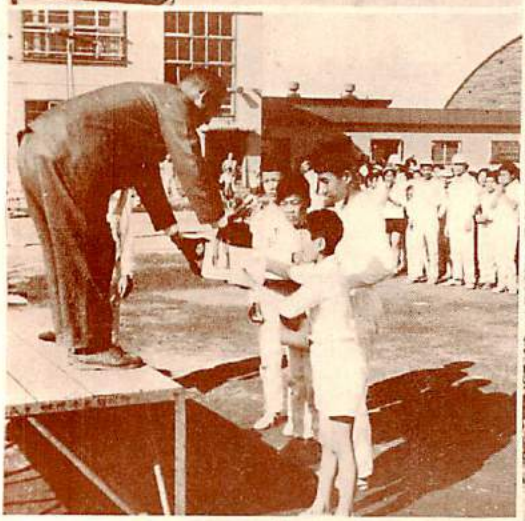
校　　旗

校　　長

全　　職　　員



運動会

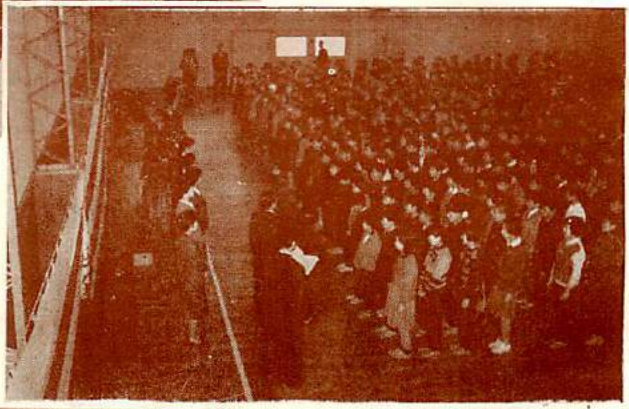


運動会

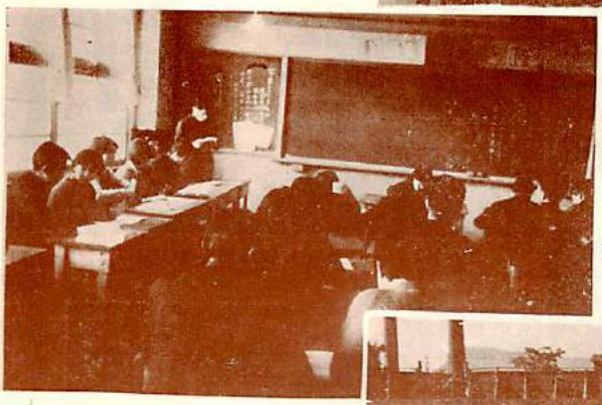
遠足

写生遠足

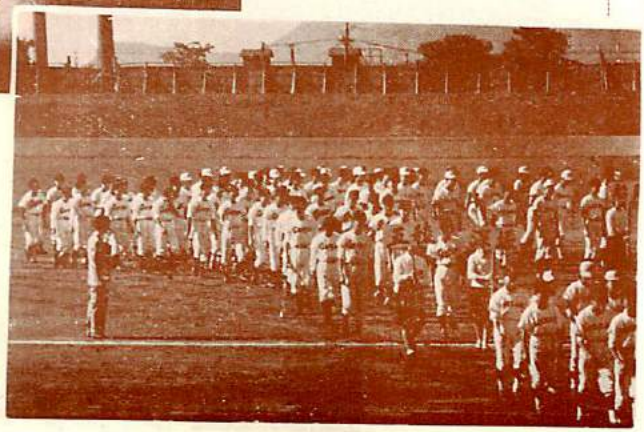
修学旅行



朝会風景



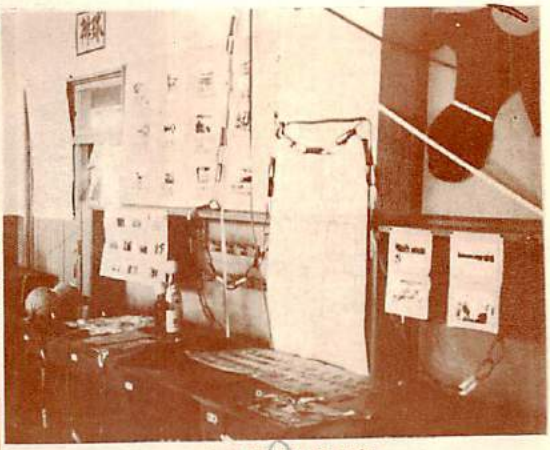
代議員会



少年野球

文化祭書道展

弁論大会



文化祭理化展示室

音楽会

登校風景

授業風景

楽しい昼食

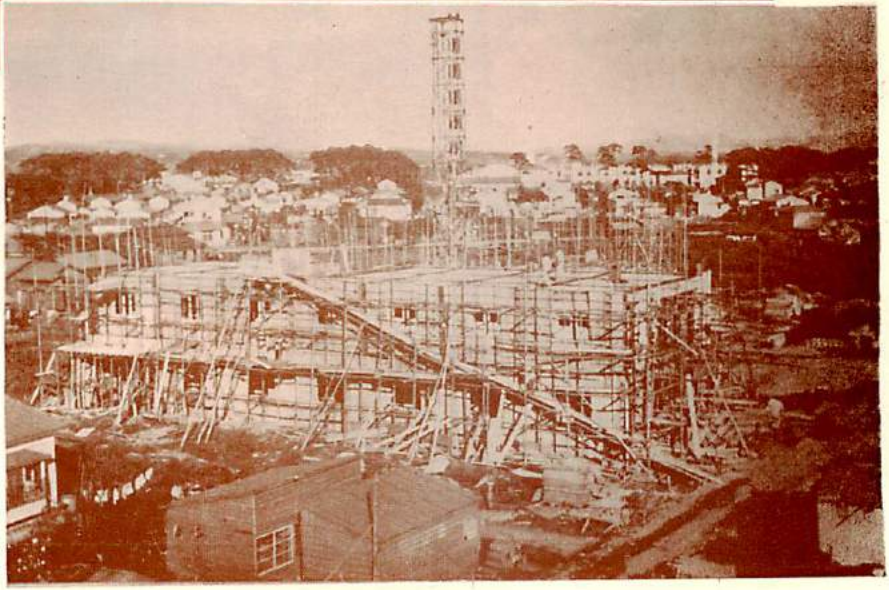
テスト風景

ある日の職員室

屋内体育館内部

校舎落成記念式典

田家分教場新築工事



骨ぐみの出来上った校舎

五　　稜

目　　次

巻　頭　言 …… 1
第一回卒業生を送る …… 2
卒業生に贈ることば …… 3
卒業を迎えて …… 4
学級プロフィル …… 5
職員随筆 …… 9
論　説 …… 13
詩 …… 16
短　歌 …… 18
作　文 …… 19
部　報 …… 27
俳　句 …… 36
校舎落成特集 …… 37
短　歌 …… 44
卒業生特集 (1) 楽しかったこと …… 45
〃 (2) 先生のことば …… 51
〃 (3) 思い出 …… 53
〃 (4) 卒業生住所録 …… 58
職員一覧 …… 65
編集後記 …… 66

巻頭言

思い出

佐々木　仁

春の日のあの淡い思い出を
　だいじにしまっておこう
春の日のなつかしい桜の思い出を
ちょうのように君の胸の中から飛んでしまわないように。
夏の日の緑に輝く思い出も
　君の心の中にくっきりと
ひまわりのようにあざやかに
暑い魂が汗となって流れないように。
秋の日のさびしい思い出は
　枯葉のように風に運んでもらおう
遠い遠いだれも知らない所へ
野菊の花だけが君の心に。
冬の冷たい思い出が
　雪のように積っても
やさしい心で溶かし
若竹のようにたくましく
君の思い出がいつまでも生きるように。

第一回卒業生を送る

校長　沼山吉之助

昭和三十六年四月、本校の一回生として入学式場にならんだ、かわいらしい諸君が、今では見あげるまでに成長している。それもその筈、あれから三年も経った、実に月日のたつのは早いものだ。

この間、耳にたこが出るほど聞かされたことは『諸君は第一回の入学生であると同時に、第一回の卒業生である』ということであった。第一回の卒業はどの学校にもあるが、諸君は一年生に入学した当時から、先輩たるの資格を背おう運命に立ったわけだ。それだけに、三年間は苦労と努力の連続で実によく頑張った。

校舎のない学校に入学したため大川、中央の両校で間借りの勉強をした。又新校舎に移転しても未完成のために増築工事が続き、本年度第三期工事で理科と家庭の二教室が落成しただけで、全部完成の学校で勉強出来ず卒業することになったことは残念でならない。このような恵まれない、教育環境の中で、諸君は、こつこつと油断なく、土台をつみかさねてきた。その結果一応の花が開いた。後は後輩によろしく、これをついで、更に本校の歴史に輝やかしい足跡を残してくれと祈りつつ去って行く。その諸君を送る私も感無量である。

諸君の大部分は進学するが、就職するものも家業につくものもある。何れにしても、これからが人生の出発である。楽しい時も苦しい時もあるであろう。選ぶ道は別々でも、人生として、行きつくところは同じである。如何なる試練にも堪えねばならぬ。それは人間を豊かにし、力を養う契機として受取るようにしなければ、人生の落伍者となる。これからは、力のある人が認められる世の中となるであろう。家柄とか、親の財、地位がものいった時代は過ぎ去った。本人の力だけが、ものをいう世の中となる。力とは、財力も力であり、知力も力である。また健康も力である。然し最も根本的なものは、道徳の力である。これにはわれわれのよき心構えが必要である。理知をみがき、思慮分別を養うことである。今後諸君は、先輩の多くの方々の指導助言をすなおな気持ちをもって聴くだけの謙虚さと、ゆとりのある態度は大切である。

諸君の先輩としての道は人生が終わるまで後輩がいつまでも続くであろう。五稜中学校の精神を立派に体得した諸君であるから、誇りと自信を持って邁進されたい。それにつけても学校の運命をになって巣立つ君たちには、ただご苦労さまと言う外ない。

最後に一言、十月十日の開校、校舎落成記念式典並びに記念行事は、思い出が多いと思うが、卒業する前に、是非という父兄の温かい親心があったことを忘れてはならない。協賛会事業として、校旗と校歌が立派に出来た、何よりうれしい。機会あるごとに校歌を合唱、互に睦み合い、助け合い、励まし合いながら母校を思い出してほしい。

卒業生に贈ることば

PTA会長　又　坂　日出生

学校設立、仮校舎、移転、落成式、校歌、校旗制定、等々。卒業生の皆さんにとっては、まことにめまぐるしい三ヵ年でありましたが、今、ここに第一回の卒業式にのぞみ、私たち父兄も一入に深い感慨をおぼえるものであります。

親愛なる五稜中学の第一回卒業生諸君、皆さんは入学以来つねに最上級生としてのびやかに育ち、のんびりと勉強して来ました。校舎内外の設備が終始ととのわなかったお気の毒な点はあったにしろ、一面、そののびやかさに恵まれたことは大変幸福であったと考えられます。しかし、その半面、古い伝統をもたなかった学校故に皆さんは、母校の新らしい歴史を創造しなければならぬ光栄ある責任をもつことにもなります。皆さんの卒業生としての使命は、その意味で大変重大であると考えられるのであります。皆さんは小さな世事に悩まされてはなりませぬ。人を押しのけるための学問をしてはなりませぬ。しかも、これからは自己の行動のすべてを、人類の平和と社会の進展に寄与出来るか否かの大局的判断にたって決定しなければなりません。

学校生活であれ、職業生活であれ、社会は皆さんに、未だ知らなかったいろいろの事を教えてくれるだろうと思います。理想と現実はつねに一致しないことを。もみあげを長くするかしないかや、長髪の可否、制服決定の是非など、皆さんが大人の圧迫を感じとっていたすべてのことが、輝かしい前途を持ちながらも所詮は未完成人である皆さんに対する大人の深い愛情であったことをも。更に、それらは悠久な人生にとってどんなにか些細なことであったかということなども。

私は原始林中の岐路にたって、はるばると見送りに来た弟子たちに「ボーイズ・ビー・アンビシャース」と手を振ったクラーク博士の言葉をしみじみと思い出します。

皆さんは、すべからく大きな夢と野心をもつべきです。皆さんのその若い夢と野心は、やがて人類の文化と幸福に連らなり、更に、成長後むかえるであろう二十一世紀こそ、私たちが待望する最高の人類社会が皆さんの手によって生れ得るだろうことと信じます。

ここに、皆さんの悠々たる卒業の春を祝福するとともに、今後のよき成長を心から祈念する次第であります。

卒業を迎えて

生徒会長　藤田真司

凍てついた北海の氷も解け、五稜郭の水もぬるむ陽春の候、ここに私達五稜郭中学校第一回生として、栄えある卒業式を迎えることができますことは、考えひとしおのものがあります。みぞれ混じりの激しい春雷の中で、初めて見る校長先生のお話もかき消されそうな大川中学校屋体で、私達大川中学校田家分教場第一学年としての入学式を迎えたのは、ついこの間のように思われますが、光陰矢の如く、三年の長い月日も、またたく間に過ぎ去ろうとしています。不自由だった分教場生活も、今は懐しく思い出されます。思えば上級生なしの私達の中学校生活でした。

それで、初めての運動会も、自分達が出て自分達が応援し、自分達が審判をしたり、用具の用意をしたり、一日中走りまわり、しかし、楽しかった思い出。

又、特急「おおぞら」の試乗会の時は、私達だけが一年生でも参加でき、試乗できて嬉しかったことや、又大谷高校の立派な講堂の英語祭に市内でただ一人の一年生として出場した時のこと。だんだん出番が近づいてきて、思わず大きな息を吸った時、二、三人後の席の人が「学校は」と聞いた。その人は大川中学校の三年生だった。「分校です。」と答えたら、「しっかりやりなさい。」の一言に今までの固い緊張もほぐれ、親学校の上級生の暖かい心が、胸にしみて嬉しかった。亀田八幡宮で行なわれた校旗の入魂式、柏手の響きの大きかったこと。又、厳粛だった校舎落成記念式典などいろいろと思い出は尽きない。

雨上がりのぬかるみの地鎮祭。それは元の職員室、今の三年A組あたりだった。一日も早く校舎が完成することを先生方と共に深く深く祈った。広々とした畑がほり起こされ、基礎が固まり、鉄骨が組まれ、大きなうなり音と共に形づくられていく校舎。時々見に来ては、移転の日が一日千秋の思いで待たれた。そうです。この学校は、私達が作ったのです。木の香もさめきらぬ真新しい廊下のフローリングにさまざまな思い出をこめてぬったワックスの感触。こういう思いもまださめやらぬうちに、ある者は社会人として、また高校進学へと新しい希望を胸になつかしい学びの庭を巣立って行こうとしています。設備の乏しい新設校での勉学は、必ずしも十分ではなかったと思いますが、この学校づくりの開拓の精神は、必ずや、私達の胸に何物かを植えつけてくれたことと思います。

学校の行き帰りに見られる色どりも彩やかな松や桜の苗木は、緑の週間に私達が行って市長からいただいたものです。暖かい恵みをうけて、五稜中学校と共に大きく枝をはり、葉を繁らせ、花を咲かせてくれと心から祈っています。先生方をはじめ、おせわになった方々に厚く御礼申し上げますと共に、今後とも蔭ながらの御鞭撻をお願い致します。

私達は、第一回卒業生としての誇りを胸に、現在を越えた高まりを求めて、限りなき前進を続けることをお誓いしたいと思います。

学級プロフィル

底ぬけに明るいクラス

三年A組

ではこれからわが三年A組を紹介しましょう。皆底ぬけに明るく仲が良く、協力心が大きいこと。これがA組第一の長所である。男女間の仲は、おそらく三年のクラスの中で一番良いでしょう。よその組でよく男女の対立した問題もあったが、私達のクラスでは過去二年間、一度もみられなかった。

又、生徒会役員の選挙の時も、候補者のポスターを皆で協力して書いたり、はったりして応援し、副会長と書記をそれぞれ当選させた。今まで一度も賞に入いったことのなかった体育行事も、これが最後だとばかりに、一致協力、そのかいあって球技大会では男子二位、陸上競技大会には男子一位、総合では三位に入いった。私達の席替えの方法をちょっと紹介しましょう。

窓側、廊下側、各一列は通称独身寮、あとの六列は二脚づつつけて男女となり同志ならぶのである。二週間毎のH・Rになると席替えなので、みんな不安と期待の混ったような顔になる。一枚の小さな紙が配られ、それに各自名前を書き、男女別々のツボに入れよくかきまぜる。議長が男女のツボから一枚づつつまみ上げて、一番前から割り当てていく。この方法によって私達はさらにしっかりと結びついてきたといえよう。

しかし、このような長所ばかりではない。先生方からは、「A組の空気はなごやかでいいが、成績の面で、もっとみんなが協力し合い、向上させなければ。」というご意見や、授業態度、ホームルーム、帰りの反省会のあり方など考えなければならない点などたくさんあります。

あとこの三年A組の生徒として顔を合わせるのは、あますところわずか五十幾日、これらの多くの問題を解決し、なおいっそう協力し合い、先生方のご注意を守り、三年生いち、立派な学級として卒業することを、担任西谷先生への心からのおくりものとしたいと思っています。

グループ活動で仲よく

三年B組

私達のクラスは、ひと口にいって男女ともとても騒々しいクラスである。二年生になったはじめだけは知らない人などもいて一時は静かなクラスだなァと思ったが、何日か過ごすうちにだんだんみんなが本性（?）を表わしてきて、すぐ仲良くなって騒ぎ出した。一番静かな時といえば数学の時だ。休み時間は、はりきって大声を出している人でも数学の時間になると借りてきた猫の子のように小さくなってかしこまって座っている。

私達のクラスは、今までは男女の仲があまり良くなかったのでホームルームの時、グループを作ってみてはどうかという話がでた。はじめのうちは男子が恥ずかしがってあまり賛成しなかったが、女

子の強引さに負けたらしくグループを作ることになり、今では男女が一緒に勉強したり、休みの日には、レクリエーションなどをして以前とはちがったふんいきになり、とても話しやすいクラスになった。これは私達のクラスが自慢できることのひとつである。今ではグループ同志で当番をやり、グループ同志で机を並べているので、なおさらみんなの心が通じ合ったような感じがする。もちろんみんなが協力してうまくやっているとは思えない。中には裏切り者（？）も出て時々当番などをさぼる人もあるが、そこはB組の良いところ。ちょっと注意すると頭をかいて、次からはきちんとやるという具合にどのクラスでもとはいえないが、男子は女子に頭が上がらないらしい。

こんなところがB組の横顔ということになりそうだ。もうすぐ卒業だが、このようなクラスをいつまでも作っていきたいと思う。

兄弟のように

三年C組

二年C組から三年C組へと担任の菅原先生とともに二年間種々さまざまな事がありました。中学生生活も残り少なくなった今日、私達三年C組一同は先生方の数々の御指導を受けてずいぶん成長してきました。

さて、最近の三年C組の生活をのぞいてみましょう。月曜日の一時間目の時です。書記が黒板に大きな字でH・Rと書く。議長が「机にあるものを全部しまって下さい。」と、例のごとく言い、「それでは今日の議題は冬休みについて。何か意見はありませんか。」

A、全然関係ない表情。B、机の下で何か本を読んでいる。C、手を顔にやりボンヤリ外の雪を見ている。一同「シーン。」これがH・Rの一場面です。みなさんに言うまでもなく、実に不活発でまるで英語の時間のような静寂さです。

休み時間はまるで白と黒の相違だ。たいくつだったH・Rの解放感を求めてか、勉強している人のことなんかそっちのけ。

二時間目のベルが鳴った。社会科だ。「先生がきた、きた。」と例のA君の声である。授業の西谷先生が戸を「ビシャリ」としめて入いってきました。先生がこの前の期末テストを返し始めた。一同は自発的に礼をしてもらいます。礼をしてもらうことは前からの習慣で、この前先生方からほめられました。このような光景は「三年C組」独特なものです。

最近は休み時間など利用して机にかじりついて勉強している人も多くなり、成績も目に見えて向上してきました。

この一年間を顧みて特に私達の印象に残った大きな喜びでは、東京への修学旅行、運動会、まだまだたくさんの思い出がありますがしかし、この中でも「校内球技大会」のことはわすれることができません。あまりスポーツの面でふるわなかったC組も毎日の熱心な練習が成果をおさめ「みごと」強敵を敗り、バレーは男女とも二位になりました。二位になった瞬間、選手また声をからして応援したみんなと手を取り合って喜びあいました。この結果自信を得たC組は「校内陸上競技大会」でも立派な成績をおさめる事ができましたしかし、もう卒業までの日も残り少なくなりました。

この二年間というものを兄弟のようにすごしてきた私達にとって卒業ということはほんとうに残念な事です。しかし、私達三年C組

一同は希望をもってそれぞれの道を歩んで行きたいと思います。

よく学べそしてスポーツも

三年D組

「よく学べ、そしてスポーツも」と言う標語があるとすると、それは私達三年D組をよく表現していると思います。

二年生のときと違って身近に迫っている就職、進学等を感じて、だれも大切な三年生の貴重な時間を有効にと一生懸命勉強しています。こんな事を書くと、だれもこちこちに固くなって勉強に夢中になっていて、なんでもかんでも教科書に見えたりすぐテストを連想するようになるのではありません。やはり教室内ははがらかです。いつもユーモアなA君の朝の挨拶の爆笑から始まって「さよなら」の帰校まで、いたって楽しいクラスです。又スポーツも盛んで「運動会」「校内陸上競技大会」「ソフトボール大会」などで数々の立派な成績をおさめていますので、賞状は黒板いっぱいに張られています。これもみんなの「協力」「団結」があればこそです。「よく学べ、そしてスポーツも」を文字通り実行しています。

他校の生徒に気の毒なくらい立派な体育館に元気一杯、いつもハッスルして運動しているのは、私達三Dのクラスが一番多いのではないでしょうか。

これとは、うってかわって私達のH・Rは、発言が少なくふだんの活発さはどこへやらです。これは、大きな欠点だと思います。

五十何名の我がクラスの人々が共に二年間の間一緒に仲よく勉学し、そして晴れて第一回の卒業を間近に感じて、私達の気持ちは一寸複雑になっていますが。

親切に御指導して下さいます担任の松井先生とともに、この楽しいクラス「三年D組」をいつまでも忘れる事はできないでしょう。

三年E組の横顔

三年E組

一見して、三グループに分裂しているようだ。がり勉とまではいかなくてもまあ、勉強熱心な勉強組、休み時間になると三々五々集まって、レスリングとも、相撲ともつかない奇妙な体操？をやってたけり狂っているもの、たけり狂う理由を聞いてみると「冬は、狂ったあとは暖かくなる」そうだ。「暖かくなるからあばれてこい」と進めるものもある。最もそう進められるまでもなく、自から廊下教室で奇声をあげて狂っている種族もある。

このごろテレビの影響は恐ろしい。もう一組、ストーブ、机のまわりに席をしめ、熱心にスターの話、テレビの話、あるいは試験、勉強の話を夢中で演説し合っているもの、まずこの三グループであろう。しかし、クラスを分けて考えることは好ましくない。近ごろ三つが徐々に歩みよりをみせてきているようだ。また、そう努力したいものである。一口に言えば、愉快な組である。

例えば、国語の時間に先生が本を読ませると、必死になって読んでいる人を笑わせようとする。また読む人も必死で笑うまいとするが結局は笑わせる方の熱心さが勝利を収める。お昼の時間は、まるで真空状態のように静かなのだが、その時も、先生のお弁当がなんとやら、しぐさがなんとやらで笑い出す人もいる。もう一つ静かな

時間、英語の時間であるが、近ごろは少し、ざわめき出している。慣れるとは恐ろしいものだ。

以上、愉快な点を紹介してきたが、やはりホームルームの時などは多少の対立がみられる。今後、残り少ない中学生時代を悔いのないよう、クラスが一致して、楽しい学校生活を送ることができるように努力して行きたいと思う。

クラスの横顔

三年F組

「ガチャン。」これは、何の音だと思いますか?。ガラスのこわれる音です。私たちのクラスは、よくガラスがこわれます。こわすのは、たいてい男子です。そして、掃くのは女子の役目です。ガラスをこわした常習犯の男子は、頭をかきながら職員室の先生の所へあやまりに行きます。休み時間はこうですが、さて授業はどうでしょう。一、二時間目なら、まだ元気よく、あちらでガヤガヤ、こちらでペチャペチャ。三時間目、四時間目は、そろそろおなかがすいてきて、元気がありません。いよいよ弁当の時間です。私たちにとってこの時が、一番楽しい時間です。校内放送の音楽などを聞いて家で作ってくれた弁当を食べる気持ちは、なんともいえません。五時間目、六時間目になると、おなかはいっぱいだし、そろそろねむくなってきます。でも、英語の時間はそうはいきません。次の時間は英語だと言う時は、みんな辞書を引っぱり出し、教科書を訳し始めます。いよいよ先生が来ました。きのうの復習をして、暗記文を言わせます。暗記してこない人は、このへんで、胸がドキドキ。先生が指示して答える事ができなかったり、暗記をしてこない人は立たされます。悪い時には、いすの上にくつをぬいで座らされます。英語の時間の終わりのベルが鳴り出すと、みんなはほっとします。二年生の始めの時などは、きょうは何回立たされたとか、毎日数えていました。英語がつぶれた日は、みんな大喜びです。

今まで、悪い事ばかり紹介してきましたが、良い面もたくさんあります。まず、男女共に、仲が良い事です。卒業まで数える程の日数よりありませんが、みんな団結し、それぞれの勉強をしています。運動の面においては、その精神がよく表われ、校内スポーツ大会（陸上競技、球技大会）においては、優勝あるいは上位に必ず入いっています。

私たちが中学三年生としていっしょにいる日は残り少ないが、これからも、団結し、協力していく事を願って止みません。

職員随筆

こんにちは免許ちゃん

笠井敬一

自動車の免許をとろうと誘われた最初は、私が教員なりたての六年前に、当時勤めていた学校の用務員のおじさんから言われたのがそれである。とうとう当時は興味がなくて手もふれずじまいであったが。そのおじさんは半月たらずでバイクに乗っていたから、一度でパスしたんだったろう。それから六年余。

生活上の必要性から免許をとるために練習に励むことにした。時まさにレジャーブームで、女のドライバーが町をゆうゆうと走っているのを見て、大いに奮闘せねばと思ったのであった。丁度またごく知り合いのお医者さんの奥様が運転しているのに町で出くわし、長男を抱いて歩いていた私をひどく刺激した。

何がなんでも免許をとろう、と思ったのはこの時以来である。

私は小学校に勤められている某先生と二人で朝早くから習うことになった。その先生は昔空軍に属され、飛行の経験があられるので何となく手つきが始めからよかったが、私はどことなく手つき、足つきが悪かったようである。教えられる人は、私を毎度のことながら、しかったところを思えば、その実力は察せられよう。クラッチブレーキ、アクセル……なんにも知らぬ私は、とにかく、やる事なすこと、どなられ通してあった。ある日などは、どうも手がつけられぬ、といった言葉も言われ、私のような気のつよい男？でも一本まいったか、と夜もおちおちねむられなかったものである。私の息子が幼い故に、夜中になき出すと、はじめて、やれやれ気が休まるわいなどと思いながらも、頭にはいつも自動車がいっぱいだった。そうこうしているうちに十日あまりたった。

初めて「うまくなった」とほめられたのである。私はシメタと思った。というのは、その日はあまり身体の調子がよくなかったのでこの調子ならコンデションさえ上手に持っていけば、一度で合格という夢のようなことも、必ずしも夢でなくなるというわけである。こうなると、あとは学科試験だけが残る。本は買ったが、その法規の本ばかり読んでいる暇がなかったため、とうとうテスト三日前を迎えてしまった。私の生涯のうちでテスト前三日まで準備に手をふれなかったという経験は、これが最初である。とうとう前日の夜九時まで、しめてまる十時間かかって大体全部頭にたたき込んだ。

当日を迎えた。沢山の人、おそらく三百人以上は、いると思われる人の中にまじって、まず適性テスト、学科テストと相ついでうけたが、その度に何十人かの人が落ちていった。

幸いにして私の番号には○印がついてあって、午後から実地試験をうけることになった。不幸にして私の前十人と一人おいてあと十人の人は連続おっこちていた。勿論その他多数の人が不運なためにあっていた。しかし、あとで考えてみると、車を運転する者が法規や

その他を知らなかったら、世の中にとって大変なことだと思って、その人たちに同情するのを少しやめることにした。午後一時から実地試験が始まった。次々に落第していった。私の前にテストを受けた十余人は一人も合格しなかった。それは当然の事だったかもしれない。定められたコースからそれたり、コース外に飛び出たり、途中でストップして動かなくなったり、自動的に点滅される青、赤、黄の信号を見誤ったり……だったからである。しかし、私自身も平素何度も注意されていたので、人ごとではなかった。自動車の運転は、私が今まで述べたいくつかの事の他にむずかしい操作がある。スムーズに発進したり、スピードの適度さ、ストップ操作、チェンジ操作……ハンドル操作、運転姿勢……etc……すべて瞬間的に、しかも正確に行なわねばならない。

いよいよ私のテストの番になった。どうも昨夜来の無理がたたったのと、緊張しているのとで、肩がこちこちである。側に居た自動車屋さんのおじさんが、太い腕で私の肩に手をかけ、「先生肩もんでやる」と言って、その太い腕をやはりぶるぶる緊張でふるわせながら、私の肩をもみはじめた。私の肩は何となく軽くなり、同時にそのおじさんもムシャブルイがとれたようだった。何せ私を除いて他の全部の人が三〜五回過去落第の経験をもつことを知った私は何となく、かくごはしていたものの、やはり人間だから固くなった。

車の中へ入いると同時に、むずかしい顔をした試験官が、「写真と書類を」と言って私からそれを受けとった。「さあ、おちついてやるんですよ」と言われ、ただちに発進となった。万事好調だった練習の時、しかりとばされ通しだった私が、自分でも目を疑うほどの出来ばえであった。走らせているうちに、ここでは、教えてくれた人が、私をしかったな、ここではどなったな、ああ、ここでは顔をまっかにして怒ったな、など次々に思い出し、それらが全くウソのように運転の方はスムーズにいった。私は、この時平素のきびしい訓練がこのようなよい結果を生んだんだと悟った。最後のコースに入いって、どうやら失点を重ねなく合格となった。待ち受けていた自動車屋のおじさんや、五、六回落第組の人たちは次々に握手を求めて来た。勿論、私のあとにテストを受けた私の肩をもんでくれたおじさんは、見事合格した。思えば、教える人がどんなにかきびしい訓練をしてくれたことがよかったかとしみじみ思い出すのである。十四日間、一日十五分間余りの訓練ではあったが、初めて受けて、一度で合格するとは全くうれしかった。私は何せ、六年余試験と名のつくものは受けたことがない。大学入試、就職試験以来である。しかもいまは、試験を出す立場にある。人生大いに愉快である「苦しみを通して光を、悩みを通して光を」という言葉は私の人生を通してのあい言葉である。何事もこんな態度で生きたいものである。私は自分の研究論文を発表する時も、又研究している時も、右の言葉を忘れないのである。一九六三年は私にとって、「こんにちは赤ちゃん」「こんにちは免許ちゃん」であった。一九六三年のレコード大賞は正に「こんにちは……」であった。

童話　見知らぬ国をさまよう旅人の話

安井　孝

昔、見知らぬ地を、行く当てもなくさまよい歩く、みすぼらしい姿をした一人の男がいたということです。その男は、とある、とて

も幸福な国をもっていたのですが、何年かすると、その国を出て行かなければならないという不思議な、きびしい風習によって、無理やりどこかもわからない遠い所へ追い出された無国籍者でした。男はその国のお役人に何とか助けてくれるようにお願いしたのですが日頃おかしなことばかりしているという理由で聞き入れてもらえなかったのです。もっとも男はその国では、いつも恋や絵筆やアポロンを敬い、たそがれのそれは美しい湖畔に悪魔の炎のように燃えあがるかがり火をたき、その美しさに魅力され、口ぐせにピカソやセザンヌをののしり、美しい物を全部自分の持ち物にし、美しいものはすべて自分が創り出してやろうと、途方もなく大きな楽しい夢を抱いては、仲間とのん気に毎日をくらしていたのでした。ですから男はいとも簡単に紙くずのように、古めかしいそら国の門から国外になげとばされてしまったのです。こうして男のさまよいの旅が始まったのでした。旅はこの男に死の旅のようにつらいものでした。そしてどこにも求める新らしい国は見当りませんでした。長い長い放浪の末、男はとうとう疲れはて、己れの不運を嘆き、その短い一生に別れをつげて、その場に倒れこんでしまいました。おいしいたべ物のこと、やさしいお母さんのことが頭の中を通り過ぎて行きましたが、最後は、やっぱりあの途方もない夢のことを考えました。それからどれだけ過ぎてからでしょうか、男はもう死んでしまった頃だろうと思い、そっと目を開いてみますと、何としたことでしょう、真新らしい石で造られた立派な国が男の目前にそびえるように建っているではありませんか。男は中をのぞきました。そして一目見るなり驚きと驚怖で気を失ってしまいました。あまりの驚きでこの時から男は自分の記憶も魂もすっかり忘れさってしまいました。

男の見たその国というのは、想像も及ばない偉大なエネルギーを含んだ高度な文明が栄え、不思議なしくみからなる社会に、悪魔のような恐ろしい怪物がうようよ住んでいるのでした。男は間もなく怪物に捕われ、その国の宮殿にひき出されました。宮殿には国中の怪物達が集まって何か儀式のようなことを行なっていましたが、男はその前につれ出され、めずらしそうにながめられました。男が恐る恐るまわりを見渡すと、驚いたことに、男と同じように捕われた人達なのでしょう、十人ほどがやはり宮殿の祭壇にひき出されていました。その人達もきっといろいろな国から来たのでしょうが、この男のようにおどおどした様子はありませんでした。中には四つの目を持った者もいるようでした。やがて、この国に来たというだけで捕われてしまった者達は、その国の法律によって、ある労働をする罰を与えられてしまいました。なまけると首をチョン切られてしまうのです。もう男にはこの国を逃げだす力がありませんでしたので仕方なくその労働をしなければなりませんでした。仕事は大へん苦しいものでした。一日中怪物の前で、さけび声をあげたり、おどりをおどったりしなければならないのです。気に入らない声を出したり、きらいなおどりをすると、怪物たちはとても憤りました。男はあまり恐ろしいものですから、怪物の前に出されると、きまってちぢみあがってしまい、ただむやみに大きな悲鳴をあげるだけで、ついにはその声も出なくなるほどでした。悪夢のような毎日で、男は身も心も弱り切ってしまいました。こんな時、男は失った自分の魂が本当にほしくなってたまらなくなるのでした。ある晩、男はつかれきって眠ってしまいますと、夢の中に、この国の二十七人の守護神があらわれるのを見ました。男はさっそく、あの時失った、楽し

い夢や思い出のいっぱいつまった魂を返して下さるよう必死にお願いしてみたのでした。二十七人の神様は口をそろえて言いました。

「それには一つの条件がある。それでもよければ返してやろう。」

条件とは、一生この国にとどまり、怪物の召使いになることでした男は大へん悩みましたが、とうとう神様の言う通りになろうと決心しました。すると神様は、とてもおいしそうな香りのする不思議な水を男に与え、急に姿を消してしまわれました。男はすぐに、その水をひと思いに飲みほし、その後深い深い眠りに落ちてしまいました。明くる日男が目をさますと、どうしたことでしょう、約束通りあの楽しい夢や、いろいろな事が元通りに思い出されるではありませんか。男は急にこの国のすべてのことが楽しく、明るく変わっていくのに気がつきました。男はとても喜び、一心に召使いとして働きだしました。それからというものは、男にとって本当に驚くことばかりでした。あの恐ろしかった怪物達が以前のように怒ったり、わめいたりしなくなり、逆にとても親切にしてくれるのです。元来男はとてもあわて者で、いつも失敗が多く、自分もこまり切っていたのですが、なんと、怪物達は、そんな時には、互いに助け合ったり、知恵を働かせたりして男を助けてくれるのでした。男はいつの間にか怪物達をだんだん愛するようになりました。そして、あの神様のおかげで取りもどした男の宝をお礼にプレゼントしようとしましたが、怪物達はとても遠慮深く、なかなか受けとろうとはしませんでした。そこで男は、必ずいつの時か怪物の知らぬ間に、怪物達の心の奥にこの宝を置いてこようと決心し、毎日細かな計画をねりながら、その時のことを思い浮かべて、とても楽しい毎日を過ごすことが出来たということです。

これは後に伝え聞いた話ですが、その男が、ある時、鏡をのぞきこむと、鏡の中には、一人の怪物の姿があったそうです。しかし、男は別に驚きも、悲しみもしなかったという話しでした。

× × × ×

玉稿を賜わりました両先生にあつくお礼申しあげます。

免許証を手にした笠井先生は、今度は車を手に入れる番だとはりきっていますが、一日も早く願望が実現できますよう……。

又、安井先生には教師一年生の手記を、童話風に描いていただきましたが、教師生活と芸術生活をうまく両立させて、良いお仕事を残していただきますよう……。

編集子は祈っております。

論説

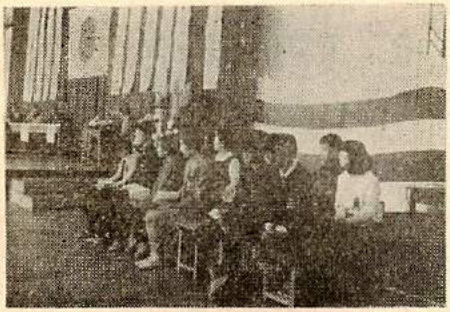
中学生の読書について

二 F 大石哲夫

読書は、私達中学生にとって、たいへん良い薬であります。そのわけは、読書することによって、私達の心を暖め、知識をひろげ、考えを深めてくれるからです。それが私達中学生には欠かすことの出来ない良い薬なのです。しかし、その薬の選び方をまちがえると薬はかえって毒にもなりかねないのです。なぜならば、本を読むにもいろいろ本の種類があり、そして、その本の種類によって薬が毒にもなるのです。たとえば、いつもマンガばかり読みふけっていたのでは、文章に対する感覚がにぶって常識のない中学生になるのではないでしょうか。今ここで長い文章や少し程度の高い本を読むのが私達中学生にとって一番良い時だと思います。それに、私達の年代になると、だんだんマンガなどがくだらなくなり小説などに興味を持つようになります。私も中学に入いったばかりのころは、いつもマンガばかり興味を持って読んでいました。しかし、二年になるにつれてだんだんマンガというものがいやになり、くだらなくなりました。そして、小説や物語などに興味を持つようになりました。これは私ばかりでなく、みなさんにとっても同様の経験だと思います。

それでは、次に本の選び方について考えてみましょう。小説や物語は、確かに、私達に人生の尊い経験や正しい考え方を教えてくれます。しかし、小説にも、私達中学生に適した本と適していない本とがあります。ですから中学生らしい健康な生活や健全なものの見方、考え方をするためには、よく判断して最も今の年代に適している本を選ぶという事が大切ではないかと思います。又お互に適してない本を読んでいる人がいた場合には、注意などもしたらよいでしょう。次に物語なども、単に、物語のあらすじだけに興味を持つだけでなく、作者の気持ちや文章のよさを味わってこそ、はじめてほんとうの読書のねうちがあるのだと思います。そこで、私は思うのであります。読書によって得た知識とは、すなわち中学生に適した本から得られたもので、くだらないマンガなどからは、幼稚な考えしか得ることができません。また、小説や物語などは、それを読む人の本の選び方、読み終わった後の感想などで、はじめて、その本が良い本か良くない本かが決まるのです。ですから、中学生に適した本をどんどん読んで人間の生き方、考え方、経験話題を豊かにして、中学生として恥ずかしくない程度の教養を身につけようではありませんか。

今はちょうど、読書の秋とも言われ、読書するにも良い季節ですみなさん、どんどん読んでおおいに学ぼうではありませんか。



大会・論弁

友だち

二 B 金谷芳江

近頃、私は友達についていろいろなことを考えることがあります。いったい、本当の友達とはどんな人をいうのでしょうか？幼な友達、遊び友達、困っている時に助けあえる友達、数えあげられないほどたくさんいます。又親切な人、いじわるな人、愉快な人、おこりっぽい人、いろいろな性格のちがった人がいます。そこでみなさんにお尋ねします。

みなさんの中に、本当に親しく信じあえる友達、そしてすばらしい友情をもっている人は何人おりますか？……もしいたとしたら、その人はたいへん幸福であり、又一日一日がどれ程美しく、楽しいことでしょう。

さて、友達のできるきっかけとは、どうしたことからでしょうか私はこう思います。英語のことわざに"a friend in need is a friend indeed"というのがあります。「まさかの時の友こそ真の友」それは、その相手が困っている場合に、大ぜいの友が見て見ないふりをしている時、親身になってその人の相談相手になってくれる友達、それが本当の友達ではないでしょうか。

よくおとなの人たちが「よい友達を選べ」という言葉を耳にします。友達が悪かったために悪の道にはいり、一生取りかえしのつかないことをおこしたり、世間に迷惑をかけたりする話を聞きますがそれも自分の意志の弱さに左右されることですが、そんな場合、よい相談相手の友達があったなら、悪の道にはいらなくてすんだことでしょう。

先日の夕刊に、「行くえ不明の三人娘帰る」として、こんな記事が出ていました。行くえがわからなく、家の人から捜索願いをだされていたある地方の三人の女子中学生が、映画館の帰り、札幌に行きたくなり、顔みしりの人の車にのせてもらって札幌に行き、遊びまわっているうちに、家の人が大さわぎをしていることを新聞で知り、あわてて家へ帰ったということです。みなさんはこの行動についてどう考えますか。……

こんな簡単なことさえもあやまると家人には心配をかけ、警察にまで迷惑をかけるような結果になるではありませんか。この場合、だれか一人が深く考えて反対したならばこんなことにならなかったでしょう。もし一人であったら、こんな行動はとらなかったでしょう。これだけでも友達とはいかに大事なものかよくわかると思います。

みなさん、おたがいによい友達になろうではありませんか。……信頼される友だちになるためには、おたがいに自分自身の欠点をよく理解し、相手の長所を見て、いろいろな会話や行動に責任をもって処理していけるようにしてこそはじめて、よい友達、そして親しい友達といえると考えます。

みなさん、いつまでも忘れられない楽しい思い出となるようなすばらしい友情に満ちた友達同志であるように、努力しようではありませんか。

一本の鉛筆から

三　F　石川京子

九月の中ごろ、私のうちに一人のお客さんがおみえになりました。その方は岡山の高校の校長先生で、昭和二十年のころまで私の父と大変親しくしていたお友達でした。父とは十八年ぶりの再会で話題は終戦当時の悲惨な生活の思い出でした。私のまだ生れる前の事なので私は大変興味を持って聞いておりましたが、その内容はあまりにもみじめな、あまりにも恐ろしいものでした。私は人間を人間としてあつかわぬこの恐ろしい戦争を二度とくり返してはならないと強く感じたのです。

それから数日たって、私達の学校で原爆患者を守る会の鉛筆を売り出しました。私はその鉛筆を手にした時、父とお客さんの話を思い出しながら、こんな事を考えたのです。

皆さんがこの鉛筆をどんな気持ちで買うのだろうか、今全国には四十万人、北海道には二千人、そして函館にも四人の原爆患者がおります。戦争が終わって十八年、今なお放射能による死の恐怖におびえる犠牲者がいるのです。その方々には本当に同情します。しかし、ただ同情するだけでよいものでしょうか。少なくても私達はこの一本の鉛筆を手にする時『ノーモア広島、広島の悲劇は二度とくり返しません。』あの言葉を思い出し、そして平和を訴える私達一人一人の祈りがこめられていなければいけないのです。ですから、あの鉛筆が何本買われるかは問題でなく、何人の人達が買ってくれるかが問題だと思っていました。あの鉛筆は五百九十四本買われました。私は少なくても五稜中学校九百人の全生徒に一本づつ買ってほしかったと思います。

現在私達のまわりは戦争の恐ろしさは清え、平和に満たされているようにみえます。しかし、世界のどこかであの当時の二千九百倍もの水爆が作られている事を忘れてはなりません。もし何かのきっかけで再び戦争が起こったとしたら、私達は全く想像もつかない事になるでしょう。

ここで私は夏休み帳にのっていたラッセル＝アインシュタイン声明を思い出します。

その終わりの方に『人間に向かって呼びかける。再び戦争を起こしてはならない。もしそれが出来れば道は新しい楽園に向かって開けている。もしそれが出来なければ、あなたがたの前には死の危険がひかえている。』と書れてあります。そうです。原水爆実験禁止の条約が結ばれても、私達はかならず戦争を防がなければなりません。もし私達の中でこの事を忘れている人がいるとすれば、その人は今の世の中で一番大切な事を忘れているのです。

みなさんに買っていただいた鉛筆はみなさんの平和を願う心であり、平和への叫びの現われでなければなりません。そのためにもあの一本の鉛筆で白血病に苦しんでいる人々に励ましの手紙を書いたり、世界中のお友達に平和へのよびかけの手紙を書いたりする事が世界を平和にする一つの糸口ではないでしょうか。

みなさん、ユネスコ憲章の最初に『戦争は人の心の中に生まれるものであるから人の心の中に平和のとりでを築かなければならない』としるされています。原爆患者を守る一本の鉛筆を買う心、そして、その一本の鉛筆で多くの人々に平和のとりでの石を一つ一つ積み上げる事になるのではないでしょうか。

詩

出帆

～修学旅行～

三年　岸田　ヒロ子

御飯ものどに通らなかった二日前
目をつぶれば東京の街があらわれ
四角の室をはねまわった私。
そして今日は
みんなに見送られて船の中
にこにこ顔の父母たち
手をちぎれそうに高く上げている父さん
りんごがはいりそうな口をあけている人
ほっぺたが落ちそうな顔、喜びの顔
みんな、うれしさに爆発しそうだ。
ボーボー
私たちに負けるものかと汽笛の高鳴り
ゆらり
大きく船は動きだした。
私はもう一度母を見る
母の鼻は東京のビルディングになった
私は大きくくつでを振った
はなやかなテープはきれて
大ぜいの人は小さく
うでだけは風に揺れてる林のようだ
「母さん行ってきます」
船は私のゆめをのせてすすむ。

おたまじゃくし

一年　高橋　英昭

今井君からもらった
おたまじゃくし
まだ卵だった
小さなかんてん質に
小さなはんてん
ビニールの袋から出して
大きな水ばんに入れてあげた
今では大きくなった
おたまじゃくし
実験のため
太陽にあててやれない
——かわいそうだな
でも
元気に泳ぐおたまじゃくし
早く蛙になって
庭をはねまわれ。

日曜日

一年 綱森哲美

今日はいつもより早くおきた。
外を見た——雨がふっている。
「なあんだ。」
「今日、野球の試合があったのになあ——。」
しゃくにさわったのでまた寝た。
少し寝てから起きた——まだふっている。
雨音をだまって聞いていたら
機関銃の音のようだった。

仁山

一年 木田まゆみ

仁山は
とっても静かだ。
すこし
さびしいような感じもする所だな。
ぽつんと一つある山小屋
そこには
ひげの長いおじいさんが住んでいた。
そして
山の中から流れ出てくる
川の水を飲んでいた。
だまって見ていたら
何百年も前に
さかのぼったような感じにさせられた。
山の中からは
かわいいしまりすが出てきたし
なんてすてきな
おとぎの国のような所なのだろう。

とうきび

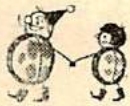
三年東　達美

秋の夕べ
庭の小さな畑に
天の恵みを受けて
みごとに実ったとうきびよ。
ポキポキと
快い音をたてて
取り入れる楽しさ。
厚い皮を取り除くと
パッとまばゆいほどに
光りかがやくとうきび。
まるで真珠のようだ。
夕日のさしこむ畑の中に
こんな美があったのだ。

短歌

雪の夜はいろりあいてに思い出す　二年　関　博及
ああなつかしきわが母の声　二年　小林陽子
木枯しの校舎の庭に人もなく　二年　菊地修司
連休の日の昼静かなり
今は亡きプレジデントの墓の上　二年　小松美恵子
ひらりと一つ散る木の葉かな
カーネーション窓辺に赤く咲いている　二年　小島英樹
母の日にまでなお赤く咲け
体育祭校歌が響く秋の空　二年　鈴木修一
一位を願う我を忘れて
雪いだく遠い山々見渡して　二年　高桑与四郎
呼べば答える冬山の声
秋空に右か左かわからずに　二年　田野井みどり
二ひき舞い迷うしおからとんぼ
冬近し庭のもみじも色あせて　二年　工藤了子
ほほに冷たく北風の吹く
夜深し床にはいりて母の語る
我を背負ったあの頃のこと

作文



家族の人気者

一年　村岡真理子

私の家には、今年の一月に生まれた「かおる」という赤ん坊がいます。かおるが小さかったころ、かおるの日課は、毎日毎日ミルクを飲んでねむるだけでした。それから六カ月後、七月にはもうすわるようになり、ねころんいてもおき上がれるようになった。

そして、やがて、「はいはい」もできるようになり、十月の末、かおるが、つたわり歩くようになった。

十一月には、手をはなして歩くようになった。そして、母が仕事から帰ってくると、私達は毎日のように、「今日は五歩もあるいたよ」と自分のことのようによろこび、はしゃいで報告した。そして、「カオンおいで。イチニ、イチニ」とおもちゃにして歩かせたものだ。

しかし今では、もう一人前に歩く。そして、ことばは話せないが少しなら聞き分けれる。「カオン、テンコトンは」というと手を開いたりにぎったりし「あんまカイカイは」というと頭をかく。そして、「バンザイは」というと、両手を高く上げてバンザイをする。又「なんなをもっておいで」というと、たなをもってきて、「バッポ」と目をかがやかせて背中にくっつく。

この前も一つ新しく覚えたことがある。それは「カオン、お母ちゃんどこいったの」というと、「ン、ン」と玄関の方を指さす。そして、「お母ちゃん何買ってくるの」というと、「マンマ」と小さい口をじょうずに動かしていう。このように毎日のようにかおるの頭は発達していくのだ。でもこんな時のかわいらしさといったらない。かおるの「マンマ」ということばは、一番最初に覚えた日本語である。かおるは、きかないのか、元気がいいのかわからないが、まず男の子と同じだ。いたずらをしても、まるでやることが、メチャクチャだ。そして肩車したり、ころがしたりすると、よろこび、ケラケラと四本の小さな歯を出して笑う。「カオン、アップ」としかると、「エエー、エエー」とよけいいたずらする。そして、たまには、おでこをピンとやられることもある。「カオンゴメンは」というと、手をこすってあやまる。これだもいくらいたずらをしたってかわいくておこれるわけがない。

もしわが家にかおるが一日でもいないと家の中はだいぶ変わるだろう。今や、かおるは家の中の人気者だ。そして、私たちのおもちゃだ。

かおる、はやく大きくなれ！
かおる大きくなってえらくなれ！

大雨

一年　阪本由貴子

夏休みに入って二、三日たったころからポツリポツリと降り始めた雨が、もう少しで川からあふれるという位降り続いた。友達の山本さんが傘を片手にもって、私の家にかけこんで来た。

「この大雨で川の水が増してもう少しであふれそうだから、いっしょに見に行こう。」と、言うことだった。

「ほんと！」と、言いながら、私も傘を持っていっしょに川の方へ走って行った。

川の所では、近所の人達が心配そうにため息をつきながら川をにらんでいる。小さい子供達が川の土手へ上がってくると、「ほら！すごいでしょ。だからこっちへこないで家へ帰ってなさいね。」と、お母さんらしい人が言っている。

ほんとうに私もすぐ岸へ行くと、おちそうな気がするので、あまり岸の方へは近づかないように気をつけていた。みんなの口から出ることばは同じだった。

「これ以上雨が降らなければありがたいですね。」「ほんとうにね。それにここいら辺は、他の土手よりも低いんですもね。」と、おばさん達は言っている。と、どこかのお兄さんの、「はいったぞう。」と、言う声が聞こえた。なんだろう？と思って行ってみると持っているカゴの中に、何かぴょんぴょんやっているものがちらっと見えた。ザルの中をのぞくとそれは、十五センチメートル位あるどじょうだった。

「こんな時に、どじょうすくいなんかやったりしてほんとうにおまえはのんきだなあ。」と、どこかのおじさんが言っていた。

川上からは大木がつぎからつぎへと流れてくる。「あの木を全部ひろったら今年の冬はこまらないぞ。」と、言う人もあるくらいだ流れて来る木が橋の両岸へたまっていった。

川は、いつものサーサーと静かに流れて行くのとは全然比べることができないほど、ゴーゴーと、にぶい音をたてている。流れてくる木と木がぶつかり合い、そこにうず巻きができる。なんだかおそろしかった。

この後雨は降らないでくれればいいなあ。

僕の可愛い弟の紹介

二年　高光　佳幸

名前はコロ。

年は七才。体はスピッツの雑種なのであまり大きくない。

もらってきた当時は、真白い毛に黒い目、鼻がほちんとついて、まるでショーウィンドーに飾ってある人形の小犬のようであった。いっしょに寝たり、家の中で遊ぶが、こまることは、所かまわず小便をしてあるくことだった。これにはいささか弱ってしまい、外に出すことに家族で決めた。

外がまだ寒いので、ちょっと可哀相だなあと思ったが、やむなく、「おとなしくしているんだぞ」と言って、そっと小屋の中に入れてやった。

しかし、夜になると、クンクンと鼻をならして戸をかっちゃき、「頼むから中へ入れてくれよ。」というようにわめくので、可哀相になり、「よし、今夜一晩だけだぞ。」と、言って入れてやった。

その時のコロは、嬉しくてたまらないという様子で、僕の手をペロペロなめ、しっぽを振って僕にじゃれついてきた。

次の日からは、小屋の入口に、厚い布で作った戸をつけてやった。初めのうちは出る事だけを覚え、はいる事を知らないので吹雪の日など、小屋の外でガタガタふるえていた。そこで小屋に入れてやると、「ありがとう。」と、でもいうようにうずくまって、僕の顔をじいーと見、クーンと泣いた。

三、四日もすると、自分ではいる事を覚えた。それはいいが、出たりはいったりしている間に、横にある木材にからまって、身動きがとれなくなって「キャン、キャン。」と僕を呼ぶ。「バカだなあ」といって、ほどいてやると、きまりわるそうにチョコチョコと小屋にはいって行った。

三週間もするといろいろな芸も覚えてきたまあ、お手、チンは普通の犬なみとして、おもしろいのは、飯を鼻の先に置いても、ぜったい食べない。

まず、「おすわり。」と、声をかけてすわらせてから、手をロばしのようにしてつきだすと、ワンワンと二度吠える。それから「いいよ。」というと初めて食べ始める。

正直なもので、おかずのいい時は、手を出す前から、「ワンワンワン。」と三度も四度も吠えるが、悪い時には、あさっての方を向いて「ワーン、ワーン。」となさけない声で吠えるだけである。

母が体を悪くしてしばらくの間、入院していたので、会いに行く時、コロを荷台に乗せて、自転車で行くと、コロのやつ調子よくな

って、荷台の上からよその犬へ「ウーワンワン。」と吠えていばっている。しばらくぶりに、コロが母に会うと興奮して四つんばいになりながら、ジジョーと小便をもらし始めた。僕は、これが病院の外であったからよかったが、病院内であったら、大へんだったなあと思い、ひやりとした。このようにコロは、前から何か興奮するとすぐ小便をもらすくせがある。

小さいころから毎朝十五分くらいずつ、小便と糞をさせに散歩に連れていくが、この習慣を分かってしまい、朝、僕が起きると、戸をガチャガチャとかっちゃいて、「早く散歩に連れていってくれよ。」とさいそくする。さいそくするだけあって、ぜったいに自分のまわりにあれらをたれない。この点は、ほかの犬と比べて、誇っていいと思う。散歩に連れて行くと、まず、いつもの木に小便をかける。長い時は、チョロチョロと、四十秒〜一分ぐらいもする時がある。このような時は、こっちの方がイライラしてきて、「早く行くぞ」と、くさりを引っぱっても、すました顔をして、ガンと頑張って動こうともしない。し終えると急に走り出す。僕も負けん気になって走るが、犬の足にはやはりかなわない。このおかげで朝のいい運動になり、おいしく朝めしが食べれるわけである。

こうしてコロもずんずん大きくなったが、大きくなるにつれて、人になつかなくなってきた。ただし、僕の身内のものには、ものすごくなつくが、他人がちょっとでも手をふれようものなら、「ウー。」とうなってかみつくので、安心してはなされなくなった。このような傾向は、犬どうしでもなってきた。はなしてやると、ほかの犬とはいっしょに遊ばず、犬とあうと喧嘩ばかりしているので犬同士の友だちがいなかった。だが、そのコロにも犬同士の気の合った友達が一びきできた。それは、隣の家に新しく飼われた雌犬のメリーであった。

このメリーといつでもいっしょに遊んでいたが、半年くらい前、メリーは病気でポックリとあの世に行ってしまった。メリーが見えなくなってからのコロは、すっかり元気がなくなり、飯もあまり食べず、夜になると、「クーン、クーン。」とメリーを呼ぶように泣いていた。僕はこれを見て、こいつなかなか情の強い犬だなあと感心した。しかし、すぐに僕といっしょにはしゃぎまわって元気をとりもどした。

今日は雪がたくさん降ったので、しばらくぶりにはなしてやった。僕がのんびりと下着姿でテレビを見ていると、外から「キャーンキャーン。」とコロによくにた声が聞こえてきた。どうしたんだろうと思って、窓からひょっと、のぞいて見ると、コロ一びきに、大きな犬一びきと、小がらな犬二ひき、計三びきでコロにかかっているではないか。僕はズボンをはくひまもなく、玄関にあったバットを片手に「畜生、よくもオレの弟をいじめているな。」という思いで、そこへふっとんでいった。二ひきの小さな犬は、僕が行ったらペッと逃げたが、大きなやつはこちらに尻を向けて、まだかみついてはなさない。「この野郎よくも」と思って、尻を思いきりバットでぶんなぐったら、ギャーンと悲鳴をあげて真一文字に逃げていった。コロに「この弱虫」と、言って雪をかけてやると、ワンといってじゃれてきた。このバカ、いつまでたっても同じだなあと思うと、小犬のころのコロを思い出し、こいつはいつまでたっても可愛い奴だと、この時、あらためて感じた。僕が一人っ子のせいか、コロが弟のように思えてならない。

ある雪の日のこと

二年　佐門　敏子

ある雪の日の朝に、学校にいく道で私はひとつのとうとい経験をしました。

その日の朝は雪がちらちらとふっていました。私は学校にいくためいそいで歩いていたが、ふと見ると、すこし前の方に、一年生の

時同じクラスであった松葉君が歩いていた。彼は手が不自由でした。私はべつに気にもとめずにいたが、ふと見たら茶色のぞうりぶくろが道におちていた。とっさに前を見らさった。やっぱり私が考えたように松葉君であった。松葉君は、気がついたらしく、そこらをさがしていたが、ぞうりぶくろを見つけて、近よって来た。いつもの私なら、すぐひろってあげたのに、どうしたわけか気がついたらそのぞうりぶくろをひろってやらず、しらないふりをしてよけてきていました。松葉君はかがんでぞうりぶくろをひろっていましたがだれもそれをしらぬふりでどんどんといってしまいます。私はきゅうに、「ああ」と口から声がでそうになった。彼はもうそれをひろって、歩きかけていたが、私はどうしてもそこをさって学校にいけず、しばらく立っていました。自分のしたことがはずかしく、顔が真赤になるのを感じました。ふと気がついてみると、もうだいぶ学校にいく生徒がへってきていました。私もいそいで学校にいったがもうすこしで、ちこくをするところでした。でも、それから松葉君にあうたびごとに、なにかうしろめたさを感じ、なぜ私は、あの時かれのぞうりぶくろをひろってあげなかったのだろうと、いまさらのように後悔しています。

それから二、三日して、学校帰りの時に柏木さんが私に「飛内君は感心ね、いつも松葉君のめんどうをみてやって」といいました。私はきゅうにぎくりとしました。飛内君というのは、小学校のときから松葉君の友だちでいつもめんどうをみてやっているという、友だちの話でした。私は飛内君にもはずかしさを感じました。心の中では、ひろってあげなければ、と思っていても、実際に行動では、ぜんぜん別のことをしていた、私の弱い意志をとりのぞき、新しく強い、すなおな心をもって、新しい年をむかえたいと思います。

いま、全国で手足の不自由な友だちのために、友情年賀絵はがきをうっています。私も一つ買いました。

私は、あの雪の日、まちがったおこないをしたことをつよく反省し、いつもこの日のことをわすれずに、あの経験をいかしていこうと思っています。

ほら吹きおじさん

三　年　外山　晴美

大阪からおじさんが会社の出張で来た。おじさんは函館から大阪へ移って行ったので、函館がなつかしくて来るのが楽しみらしい。と言ってもそんなに感傷的な心の持ち主ではない。兄と私はこのおじさんが大好きで函館に行くなどという手紙が来ると毎日毎日首を長くして待っている。

おじさんが函館から行く時新婚旅行を兼ねていたので淋しかったが心からお祝いした。今ではたまに会うのを楽しみにしている。

家では良いパパらしい。去年私が遊びに行った時は赤ちゃんをお風呂に入れていたのでちょっと驚いた。

おじさんはほら吹きだが、ただのほら吹きではなく、その上に大の字がつくほどの大ほら吹きだ。たとえば「今、門の前で不良を四五人なぐりとばしてきたから見てきてごらん」とか「学生時代にボクシングのチャンピオンをやっつけた」とかいろいろ全く信じられないような事を言うのだ。

おじさんは学生時代、家にいたことがあるが、その時、私はまだ小さかったのでほらなどというものがわからず、ずい分スーパーマンみたいなおじさんだなと思ったりした。でも、私はこんなほらを聞いてバカバカしいと思うより何だか楽しくなってくる。

おじさんが前から言っていたほらの中に外国旅行をするっていうのがあった。それがいつのまにか本当に社用で実現することになってしまった。それで今度函館に会社との打ち合わせで来たのだ。いろんな所を廻るそうだが、その中にアフリカ一カ月滞在っていうのがある。又いつもの調子でおみやげは何がい

い？ていっているけれど、今度はなんだか一人で行くっていっているので心細そうだ。私はそれよりおじさんがアフリカの土人にどんなほらを言うことだろうと、今から考えてみてもおかしくって笑い出してしまいそうだ。

親友

三年　中川　紀子

私の一番の親友は、及川由美子さん、愛称「ゆっちゃん」です。ゆっちゃんとは小学校の三年生の時から同じクラスでした。その時は、家が離れていたせいかあまり親しい友達ではありませんでした。ただおもしろい人だなあと思っていました。しかし、六年生の三学期頃からなんとなくつき合うようになったのです。それは、私たちが新しい中学校へ入学することになったからだと思います。私もゆっちゃんも区域が同じなので、「同じクラスになれるといいわね」と話し合った事が、何度もありました。その念願がかなって一年生の時は、同じクラスになれました。ゆっちゃんは明朗でユーモアたっぷり、そしてとても親切で思いやりのある人です。その時から私たちは、本当の親友になっていました。そしてなにをするにも二人いっしょです。成績カードもお互いに見せ合うようにもなりました。私が病気で学校を休むと心配してすぐ飛んで来てくれます。だから二年生になる時、「離れたらいやね」と言い合っていましたが残念なことに、私はD組、ゆっちゃんはF組と別々になってしまったのです。しかし私たちの交際は、以前と全然変わっていません。かえっていっそう親しくなったような気がするくらいです。

私たちは、相談したい時や、困った時などは二人でいっしょに解決します。休みが続いたり、たいくつな時は、お互いに手紙を書いて交換しあったりもします。

二人よるとすぐ笑ってなかなかとまりません。電話で話していてもすぐ笑うので、電話の時ぐらい、笑わないで話だけにしようと思ってもやっぱり大声で笑ってしまいます。他の人は、「あなた達二人は似ているわね」と言います。「どういうところが似ているの」と聞くと、「笑うところと、それに……太っているところ」と言うので、私たちは、「うそでしょう、細くて、スマートで、お上品なところでしょう」と、言って、二人で顔を見合わせてまた笑ってしまいます。

私は、どんなことがあってもゆっちゃんとはいつまでも交際を続けたいと思います。

席をゆずること

三年　村岡千鶴子

我々若者は、老人達を少しでも助けなければならない。いつも父母は「おまえが、おばあさんになった時のことを考えるんだよ。」と言って聞かせる。そこで、時々自分の将来の事を考える。そして、せめて、乗りものに乗った時だけでも、老人達を助ける意味で、席をゆずってあげようと心がけている。しかし、ねむい時や、つかれている時などは、腰が上がらず、とうとう声が出ないままになってしまう。

この前も満員電車の中で、ようやく席へつけたので、「ホッ」とした所へ、七十才前後の色の黒い元気そうなおじいさんが入って来た。私は、「私の前へ来たらゆずろう、向こうにいるし、あんなに元気なんだもの……。」と思っていたら、おじいさんは、人ごみの中で、もみくちゃにされながら、私の前に来た。「やっぱり、元気そうだって君にはかなわない。はやく立つんだ、そして、おじいさんをすわらせてやるんだ!!」とはげしい口調で、心の中のもう一人の私が叫んだ。「でも……。」「でも？なんか言っているうちに、時がたってしまうんだ。はやく、はやく!!」私は、もう一人の私には勝てなかった。そし

て、立とうとした時だ。隣のおじさんが、「どうぞ。」と言って、席をゆずった。その時は、本当にいやな気持ちで、そのおじさんの顔を見るのも恐ろしい気がした。なんだか、その人が、「自分よりも若いくせに、席をゆずらないとは……。」と、おこって私の方をにらんでいるのではないかと思って、どうしても顔を上げることが出来なかった。でもよく考えてみると、ゆずるのが遅かっただけでくよくよする必要はないのだが、まして、理由のない悪い感じがした。それから私は、席があいていても、あまりすわる気にはなれず立っていることにした。

ある日の電車の中で、ふと向かい側の座席へ乗客の視線が集中した。そこには、三人の金色の毛をした、巨人のような男達がすわっていた。彼等は、何やら我々日本人にはちょっとわからない「あちゃら語」でペラペラやっている。途中の駅で一人の子供を背おったおばさんが乗った。するとどうだろう。彼等のうちの一人が他の二人に「ペラペラスタンダップ」と言って立たせた。（私にはスタンダップ」よりわからなかった）そして、そのおばさんに、「プリーズ、スィットダウン」と手を出して、おばさんをすわらせたのである。私はおどろいた。彼等達でさえ、ことばもわからないのに、手まね、足まねで一人のおばさんをすわらせようとしたのだ。私は、「同じ国の人々でありながら。」と自分の行ないに腹を立てた。

そういう経験をしてから、私は、席をゆずることは、考えていた程たやすいものではなく、真心がないと出来ないものだと思った。それから、車内で席をゆずっている光景に出会うと、その人に一人の若者として感謝し、「尊敬できる人だなあ」と、思うようになった。

本当に、席一つゆずるという、他から見れば一円の価値もないような、小さな、小さな事にも、大きな勇気と深い思いやりの心とが必要とされる。非常にむずかしい事である。こう書いている、自分に「ガッカリ」した。「でも、もうこれからは、必ず席をゆずることが出来る。わざわざ席があいているのに立っていなくても、どこでもすわれる」と言えるだろう。

写　生

三　年　谷岡真知子

学習会から帰ってきた私は、たいくつなので、純の家に行った。純というのは私の従妹である。私たち二人は、写生に行くことに決めた。

さっそく私は、特急列車で、写生の道具を家に取りにいき、今年買ってもらった麦わら帽子をかぶって行くことにしたが、どこへ行くか、何を書くか、決まっていたわけではない。ちょうど四ツ角まで来てから真純会議を開き、向こうに見える松の木を目標にして歩いていくことにした。太陽はジリジリと私のどす黒い肌をひりひりするほど焼きつける。汗かきな私は、大粒な汗の玉がほとほとと落ちてきた。あたりはもういなかという感じで田んぼがあったり、古いわらぶき屋根の家があったり、とうもろこし畑があったり、ほんとうにのんびりしている。右左に田んぼの見える道をどんどん目的地に向かっていった。田んぼの横には、小さな小川が流れているがその水は透明で、底の小さな石までがはっきり見える。田んぼへ流れ込んでいる水は、青くはなく、むしろ白い噴水のようだ。田んぼのわきに、わらぶき屋根の大きな家がある。そのわらぶき屋根には、小さな黄色い花が、小さいながらも、太陽に向かってぐんぐん伸びているように見え、とても美しい。家のわきには、とうもろこしが、緑色の葉をなおさら緑にして、実の上には青くて若い毛を出し何となく優美だ。こんなステキな道をどんどん歩いて行くと、やっとの思いで、松の木が見えてきた。二人は山へ登って、やっと頂上へついた時のような感じがして、すぐそこへ座ってしまった。目的地についたのだし、ま

だ歩くのはやっかいなので、そこへ腰をすえて書くことにした。草が足にあたってくすぐったい。ちくちくするので、見てみると、青い虫がごそごそはっていた。背すじが寒くなった。純は、左側にNHKのラジオの塔を書いたらしく、スイスイと書き始めた。私は、道から、少しそれた所にある、大きな家と、そのまわりの畑を書くことにした。この家は家のほうの屋根は、かわら屋根で、とてもりっぱだが、なやのほうは、わらぶき屋根でできていて、少しかたむきかけている。家のまわりには、こんもりとしたオンコの木、それから、名前はわからないが、すらっとした木など、小さな森のようだ。まわりの畑には、とうもろこし、キャベツ、そしてねぎなどが植えられていて、お金持ちらしい。書き出してから三十分ぐらいたったろうか、純はもう下書きを終えて、下塗りにかかったが、やさしいようで、なかなか難かしい。

太陽はまだようしゃなく照りつけている。帰りには、川へよっていこう。

文作

声の年賀状

二　年　奈良香代子

十二月のある末の日、父が「さっき昨日出した年賀状と去年来たのを調べていたら、病院に出していなかったよ。」と言った。そして父は「やっぱり親類には三日までつくようにしたいが、今からだしたってまにあわないし。」と言った。

すると母が「前からね、考えていたんだけれど、あんまり子供達がテープレコーダーに声を吹きこんで再生しては楽しんでるのを見て、一度おじちゃんの所に、私たち一家で声を吹きこんで送ったら、どんなに喜ぶかと思っていたんだけどどう?」と聞いた。私たちはすぐ賛成した。そして吹きこむ日はやっぱり年があけてということで一月一日にした。

年があけて一月一日みんながそろった所で吹きこむことにした。まず父が新年の挨拶をし、そして祖母、母、兄達、私と順々に吹きこみ、次に一人ずつ歌を歌い、最後にせき別の歌をみんなで合唱した。しかし、それだけではものたりないというので、うらにも吹きこむことにした。二回目は主にことづてなど葉書に書くよりこう果があるようなことを吹きこんだ。私は修学旅行の日程などを吹きこんだ。そして司会役の兄が「テープも残り少なくなったのでお別れにホタルの光を歌います。」と言ってみんなで歌ったが、まだテープが少し残っていたので最後にみんな一言ずつ何か言った。そして最後に兄が「本当にテープも少なくなりました、ではさようなら。」と、言って終わりました。

後で最初から聞いてみると、歌はまあまあだったけど、あいさつは全然、特に私の声などはかぜをひいた時よりまだひどかった。しかし、後からどんなにおかしくても、とてもシャレタ年賀状?だなと思った。

兄が帰って、しばらくたってからの秋田からの手紙に「テープを聞いてとても楽しかった。おじいちゃんたちも、すごく喜んでいたどうもありがとう。」と書いてあった。この手紙を読んで父は「来年もやろう。」と言った。私も「そうだ。」と思った。

チーコ

二　年　樋本　正史

チーコが生まれたのは、去年の九月のことだった。僕が学校から帰ったら、母がうれしそうな顔をして、セキセイインコの箱をのぞいている。「インコの卵がかえったな。」と僕は思いながら「かえったの。」と、母に聞くと、「ああかえったよ、三個とも全部ね。」と、うれしそうに答えた。箱をのぞくと、セキセイインコのおすが、僕が顔を出したのをけいかいし、口を大きくあけ、僕をにらんでいた。巣箱の中では今かえったばかりのひなが「チーチー。」と、鳴いていた。

母が、「あまりのぞいたらだめよ、めすが

だかないから。」と、言った。このセキセイインコは、母が飼っているカナリヤの子ととりかえたものです。

母は、はじめてセキセイインコのひなをかえしたので、とても喜んでいた。だが、その喜びもその日一日だった。次の朝、ひなが二羽死んでいた。餌は入っていたが、親にふみつぶされて死んでいた。あとの一羽はかろうじて生きている状態だ。父は、「あまり、のそくからだ。」と言った。母はがっかりしていたが、あとの一羽を、ほおっておけないので、弟と二人で餌をやったり、温めたりして親鳥のかわりに育てた。そのかいあって、その一羽だけはスクスクと育った。

セキセイインコは、すっかり羽がはえ、一人で餌を食べれるようにならないと、巣箱から出て来ないのだそうです。僕はカナリヤとちがって、むずかしいんだなあと思いながらひなの出て来るのを待っていた。

それから二週間くらいたって、やっとひなが出て来た。まだすっかり羽はそろっていなかったが、とまり木に親といっしょにちょこんと、とまっている姿は、とてもかわいい姿である。

みんなでひなに名前をつけることにした。弟が母に、「あれめす、おす?」と聞いた。僕は、知ったふりをして、「あれはおすだろう。頭にとさかのようなのがあるから。」と言ったら、父が、「あれはめすだよ、鼻の先に色がついていないだろう。」と言った。それからみんなで二十分ばかり話し合った結果弟が提案した「チーコ」という名に決定した。

次の日から母は毎日のように、チーコを出し、ならしていった。そのかいあって、今ではかごの戸をあけておくと、一人で出て来て肩に乗ったり、頭の上で遊んだりするようになった。特に、頭の上がすきらしく、いつも頭の上で遊んでいる。母がいつのまにしこんだのか、口から物をもらうことをおぼえ、それがとても気に入ったらしく、かごから出すと、必ず一回は口で物を食べさしてもらわないと、耳でも、鼻でも、どこでもつっつきまわるので、手がつけられない。

チーコを出してこまることがあった。どこでもところかまわず、ふんをたれることだ。チーコをかごから出すと、一人が紙を持っていて歩かなければならないほどである。気をつけていないとふみつけたり、服につけたりする。母もこれにはこまっている。鳥だからしかたのないことです。

かごにもどす時が又たいへんである。チーコは入りたがらない。それもむりはない。一回出すくせをつけてしまったら、もう入りたがらないのである。

この冬休みチーコの親が卵をかえしたのでぐっとにぎやかになった。母はとっても喜んでいるが、声がすごいので、父は、「今でさえうるさいのに、又うるさくなるなあ。」としぶい顔をしています。

母は、こんどのひなは、もっとちゃんとした芸をしこむとはりきっています。

部報

クラブの歩み

文化クラブ

美術クラブ

今年の美術クラブは、去年にくらべ人数もふえ、活動は、毎日といっていいくらい、とてもさかんで、だんだん美術クラブも発達して来たと思います。

指導して下さる先生は、親切で清けつな、菅原先生と、ハンサムな安井先生。

春にやったクロッキー、先生に、線がたりないと言われ、コンテで手を真っ黒にしてやったが、直して、直していって、何がなんだかわからなくなってしまったこともあった。放課後、図画を描きながら、学校であったことを話し合ったり、おもしろいことを言っては、しきりに笑わしているKさん、とてもおもしろく、ユーモラスたっぷりなみんなです。

何と言っても、おもしろかったのは、文化祭に出す石膏だ。石膏を使い、花びんを作ったり、たてから見ても、横から見ても、何が何だか、わからないけれど、絵の具でもようをつけたら、とてもきれいな置きものになった。私はそれを、芸術祭参加作品だと言っていっしょうけんめい、出来上がるのを楽しみに作った。Yさんの顔、Tさんの顔、みんな石膏で、顔が真っ白だ。ゆかを見ると、いつの間にきたなくなったと思うほど、真っ白くした。びっくりして、ぞうきんをもってきて石膏をふきとった。けれども、私達はとても楽しかった。

私達は、スポーツもやり、また、ますます楽しい、よりよいクラブをきずき上げ、もっと、もっと進んだ美術クラブにしようと思っています。

（近江谷末子）

書道クラブ

部員は、一、二、三年合わせて三十名程（そのうちのほぼ半数が一年生）で、指導の先生は金田先生だ。クラブの練習日は隔週木曜日の放課後である。私達三年生は、学習や、その他のテスト勉強などで思うように練習した日は少なかったが、一年生、二年生は実にまじめに練習していた。時間にとらわれないで練習した夏休みも過ぎ、文化祭の行事が近づいてくると、さすがにみんなそろってまじめに顔を出し、練習も思うようにできたし、先生も喜んでおられた。みんなそろって出てくれたことは、私にとってもうれしいことだった。先生の肉筆のお手本や、墨心会編集の「ひつりん」先生秘蔵の参考書などまで持ちよって練習し勉強した。教室の中はシーンとして、声一つなく、する墨の何とも言えぬよい香りがただよう。文化祭の当日こそこの成果が花として開く日である。

そして、運動会のクラブ対抗リレーに惜しくも首位を逸したが、二位に入った私達は、ただに机上の虫ではないことを明らかに立証

したのだ。

私達三年生が、この愛する学びやから巣立つ日はもう遠くはないが、このクラブの書道を通じて会得した精神を持って事に当たる心がまえである。私達の後輩が、さらにこの道を深めていってくれる事を信じて疑わない。

部員卒業生　青山、泉谷、葛城、熊谷、酒井、山本、吉川（青山啓子）

音楽クラブ

部員約五十名ですが、わがクラブの今年の活躍はすばらしいものでした。今年は一年生から三年生までそろったので、毎年やっている唱歌コンクールに出場しようと練習しはじたのが六月ころでした。コンクールでは混声三部合唱です。しかしそのころは、男子部員がたった一人だったので、男子部員を集めるのに一苦労でした。それまでの練習は、週二回でしたが、本格的に練習するようになってからは毎日のようにやるようになりました。

夏休みは、みんなが海に、山にと休みを楽しんでいるあいだでも、クラブ員は土曜と日曜をのぞいて登校し、練習に励みました。たまにはすぐおぼえるやさしい歌を歌ったり、全国の優秀な学校の美声をきいたり、自分達の歌いぶりを録音したり、いろいろ研究、勉強をしました。また休みが終わってからは昼休みにもボリュームを出す練習をしました。

いよいよコンクールの当日、舞台にあがったみんなは緊張しましたが、歌っているうちに落ち着いたのか、みんな練習のときよりものびのびと歌いました。審査の結果、優秀校にはなれませんでしたが、数少ない優良校にえらばれました。その瞬間、みんな手をたたいて喜びました。誕生してまだ日のあさいわがクラブが優良校にえらばれたのですから、ほんとうにすばらしいことです。

来年こそはきっと地域代表になれると私は確信します。それには地味な努力と、よいチームワークが必要です。来年のみなさん、おおいに意欲を燃やしてがんばって下さい。

（辻　由紀子）

社会クラブ

今年のクラブ員は三年生が大半で、一・二年はごく少数ではありましたが、非常に自主性があり、活動的であったと思います。

見学プランは日本精酒函館工場（五稜郭の千歳鶴の工場）をかわきりに、北海道電力函館支店・消防本部・NHK函館放送局・亜細亜石油函館精油所（上磯町の七重浜）など次々と行ないましたが、ガス会社・製菓工場・市交通局・北乳クリーム工場などが残ったことは非常に残念に思っております。

クラブの新聞発行も第三号まで進みましたが、学校行事や進学準備などがあり思うように進まず、市内の中学校と録音テープの交換も計画しましたが、要領がよくわからないのと、指導の先生に技術的に初歩から手ほどきをうけねばならぬので残念にも計画だおれになりました。しかし、最初のこころみとして四国旅行においでになりました校長先生にいろいろマイクを持ってお伺いした録音だけは西谷先生のご指導でどうにか形どおりのものがとれましたが、校内放送の十一月二十五日（日）はあいにく放送機に故障があり、いい放送にならず惜しかったと思います。

後輩の皆さんにお願いすることは、私達の出来なかった見学とテープ交換は是非実現して下さるようにということです。又、文化祭には私達はお手伝いにまいりますので、今年におとらないものをやって下さるよう希望を述べさせて頂き、クラブ報告に代えます。

（副島　隆）

化学クラブ

我が校の化学クラブはクラブとして発足してから早くも三年になります。初期の頃は設

文化祭理科展示風景

備はもちろん、化学班の実習用薬品なども全然といってよいほどなく、実習なども教科書をそのまま、まねする程度で、何の進歩も見いだされず、総人員数もわずか四名だけで、科学クラブの化学班という一班にしかすぎず皆もあまり熱意がなかったようです。しかし翌年には新任の石塚先生を迎え、設備もほぼ整われ人員も新入生が加わり、科学部の約四割をしめる程度まで増大し、その半数は女子部員となりました。

又、夏季休暇には見学や、実習なども自主的にやり、学習及び実習は高度の化学までも進み、わが校のクラブ活動としてますます大きな存在となりつつあります。文化祭においては一教室を開放し、部員の創意、工夫した作品を展示したり、化学クラブの本「化学史」なども出版しました。「化学史」の内容はあまり目立ってよいとは言われず、参考書を写した程度なので、もう少し早くから各自が心がけてしっかりした内容の物を出版出来なかったことを反省しております。

最近、三年生は就職や進学の勉強に忙しく実習などは休業状態にあるが、来年度は理科室及び理科準備室なども完成される予定なので、設備も充実し一層意欲的な活動が出来ることと思われます。我々も三月にはクラブとも別れなければならないが、後に残る部員がなお一層クラブの発展に努力し、五稜中学の名にはじないりっぱなクラブにしてもらいたいと思っています。

（内手　進）

文通クラブ

私達のクラブは主として外国の子供たちに興味をもつ人たちでつくられています。昨年部の顧問である笠井先生が、先生の多忙な日程をさいて、しかも、先生の研究にめいわくをかけるようなことが考えられた時に、このクラブは先生の助けの下に発足しました。

最初、アメリカのウインスコンシン州の中学校の校長先生から、よろこんで文通したいという申し入れがありました。それは二、三年の生徒のみなさんは、よく知っておりましょう。又、一年生のみなさんも、新聞などでそれらについて知っている方もあると思います。その後、シカゴ大学付属中学校の校長先生のリヘージ先生から笠井先生あてと、市の教育長先生あてに文通の交流をしたい旨返書と公文書がまいりました。しかし、いろいろな都合から、なかなか計画した通り文通できなく、困ったことがありました。でも、私達は、このたび半年かかって作ったり、書いたりしたものを荷造りして贈ることができました。多分そのうちに返事がくるでしょう。

海を越えて文通することは簡単なようで、なかなかいろいろな苦労があります。英文が書けないといけないのは勿論すでが、まず根気のいることです。互いにいそがしい中をさいて文通するのですから。又、郵送料なども高いので十分おこづかいを、ためていないと大変です。なにしろ、紙一枚でも八十円は最低かかるからです。こんなわけで今年は満足いかない活動でしたが、来年からはきっと成長していくでしょう。みなさん大いに外国の子供たちと仲よくしましょう。（佐藤英子）

生物クラブ

私達、昆虫や植物を採集する者にとって、生物クラブはなくてはならないものでした。しかし、私達が、一年生になった時には、生物クラブは科学クラブの一グループにすぎま

せんでした。もちろん教えてくれる先生は千葉先生一人でした。その頃は全く名ばかりのもので活動していませんでした。しかし、二年生になると新しい一年がはいってきて、生物の方のグループの人数もふえました。そして、夏休みが終わって標本などが展示された時には、たくさんの標本や、おしばなどが出品されました。このことからしても前の生物グループとはうって違い、すっかり進歩しました。

やがて冬もすぎて私達が三年になった時にようやく生物グループは、科学クラブから独立して生物クラブとなりました。生物クラブの過半数は一年生でしたが、それでも私達上級生は喜んでやりました。

五月にはいって、ようやく生物クラブ全員で、滝ノ沢に採集にいくことになりました。採集当日は、ヘビがでてきて、あまりいい気持ちではありませんでした。それでも、当日はたくさんの昆虫や、植物を採集してきました。生物クラブ全員で採集する機会があまりなく、数回に終わりましたが、個人個人でもみんな活発に採集しました。

最後に、今、生物クラブには二年生が一人〜三人くらいなので、ちょっと心配ですが、それでも生物クラブは、たゆまず発展を続けるでしょう。

（大村　信一）

発明クラブ

発明工夫部は、今年発足したばかりのクラブである。部員数は三十五名、毎週火、木曜に集まって、それぞれ自分のアイデアを発表しあう。いままでに発表された主なものは、『カーテン自動開閉器・調節式本立て・目ざまし兼牛乳出し入れ器』などが発表されている。坂牧先生を中心として、ひとりひとりのアイデアをみんなで良い点、悪い点、改良したい点などの意見をだしあって、ひとつのアイデアをもっともよくするため、みんなで努力をしあって初めてそのアイデアは製作に入いる。こうしてひとつのアイデアは、部員全員によって生かされ、発明工夫部の作品になる。

いままでは、あまりよい作品が出ず、函館市の発明工夫展でもよい成績ではなかった。クラブ専用の教室もなく、工作するのに必要な工具もなかったので、むずかしい工作なども出来なかったりした。そして、せっかくのけっさくなアイデアも工作出来なくなったりした。しかし、これからは、クラブの教室も出来たし、工作に必要な工具もじゅうぶんそろったので我々部員一同はこれらを有効に使って、これからもっともっとたくさんのアイデアを生かして作っていきたいものである。現在は主として二年生が中心になっているので、来年度は、下級生の新しい入部を大いに歓迎する次第である。

（大石　哲夫）

数学クラブ

新学期、私がまよいまよって決めたクラブがこの数学クラブでした。理由はいろいろありますが、やはり数学ができるようになりたいというのが一番の理由でしょう。そして私と同じ考えを持った二十一名の人達が集まりいよいよ活動が開始され、私達は大変はりきりました。ところが私達が勉強するはずのかんじんの本がまだ会社から届いていないのです。（この本というのは、岩波で出版している「代数入門」という高校生用の本で、大変くわしく説明してある本です）そこでクラブは一時中止の状態になりました。けれども、だんだんに他のクラブの活動が活発になってくると、もうがまんできなくなった私達は、先生から本を見せていただいて、それをプリントにし、こつこつとやり始めました。そしてやっと本が届いたのはもう夏休みが近づいてきたころでした。このころになると、今まで数学部員だった人も運動部に移ったり、あるいは、二つ一緒に入っている人も中体連近

くになると、だんだんと顔を出さなくなってきたのです。二十一名のクラブ員も名前だけのクラブ員になってしまいそうでした。でも放課後、土門先生と一緒に四、五人の人達だけで勉強しました。むずかしい問題も一つ解き、又一つ解き、こうして一時間半、外が薄暗くなりかけたころ学校の玄関を出た時の気分は、それこそ天下の秀才にでもなったような感じでした。

こうして中体連が近づいて運動部がさかんになるのに反比例するかのように、数学部が活動しなくなった理由はいろいろあると思います。そこで後輩のみなさんに願うことは、私達三年生が出来なかった事、たとえば単なる勉強だけでなく、ある物についての研究などをし、来年はもっともっと立派なクラブに完成してほしいと思います。（大石　哲夫）

家庭科クラブ

新学期が始まり、新しくクラブの編成がされました。私達のクラブ員は二十一名、人数こそ少ないが、さっそくクラブの活動が始められました。第一回目の時には、部長を選出し、これからクラブの活動について話し合いました。

会を重ねることに、皆うちとけ合って、それぞれ研究し合ったり、教え合ったりして、自分の好きな物を作っていましたが、夏休み過ぎてからクラブ員全部でなにか作ろうということになり、いろいろ相談し合った結果、レースでテーブルクロスを編もうということになりました。みんなで参考にする本を集めてデザインを決め、先生にお願いして涼しそうな水色の糸を買っていただき、放課後、遅くまで残って一生懸命に編み上げました。

又、十月に行なわれた文化祭にはクラブの作品として、ろうけつ染めの、のれんを出品しました。みんな染め物をするのは初めてなので、先生の御指導に従い、バラフィンをけずった中に、松やにを少し入れてとかし、ろうがき、着色、ふせろう、地染めと仕事を進めていきましたが、最初からむずかしい多色染めにとりくんだため、失敗する人もおりました。

女子だけの部なので、手と一しょに口のほうも盛んに動き、おしゃべりをしながらの楽しいクラブ活動でしたが、三学期には調理室もできるので、こんどは調理などもやりたいと思っております。

（斎藤真佐子）

運動クラブ

陸上クラブ

「雨にも負けず、風にも負けず、ただひたすらに目標に向かって前進する。」これが、陸上競技のモットーである。我々部員は陸上競技を通して、立派な社会人になることをめざしております。しかし、我々の前には学習という厚い壁がはりめぐらされております。学習を忘れることなく、しかも練習効果を上げること、これが我々部員に与えられた、最も大きな課題であります。

幸い、立派なグランド、体育館をもち、熱心な小川先生のコーチを受け、毎日励みある練習をしております。〝練習〟これを除いては、我々の生活はありません。練習は決してゆるいものではありません。練習は自分との戦いです。我々は現在、練習以上にきびしいものを知りません。練習に負ける部員は、学習にも生きることにも負けてしまいます。練習に打ち込む努力をもってすれば、我々には何一つ不可能ということはありません。我々部員は陸上競技というスポーツを目的とはしていません。我々は、社会人となるための手段としているのです。しかし、時にはつらい

練習からのがれようとする心が強くなることがありますが、部員が団結して練習することは、すべて自分のためです。昨年の中体連陸上競技大会のあの感激を忘れず、伝統を守るためにも、陸上部の諸君、今年の大会めざして大いにハッスルしようではありませんか!!

（宮下　隆）

野球クラブ

今年の野球部の活動を記録すると

○一、対光成中　5—2
×二、対日吉学園　1—0
○三、対大川中　6—2

これらの試合は夏休み前に行なわれた練習試合のもので、一同自信がついたように見えた。

少年野球大会

×対光成中　6—0

練習試合に勝っていたので、甘くみたせいか、相手が非常に上達していた。好天気で、絶好の野球びよりであったが、全体に盛り上がりの少ない試合だった。

夏休みを経て

○一、対付属中　6—5
○二、対大川中　2—0

これを見て、いかに我々野球部が練習試合に強いか分かったと思う。

中体連野球大会

×対光成中　2—1

この大会に備えて、先生方から慎重にお話しを聞き作戦を立てたが、結果は皆さんの見た通りに終わってしまった。

以上、野球部の活動を記録しておきますが今年の野球部は〝一つやってやろう〟という根性、闘志がまるで少なすぎた。決して素質に恵まれなかったとはいえないと思う。その理由をあげると

一、集まる時、全員きちんと集まったことがない。
二、練習中、ぬけ出す者がいる。
三、先生方が来られない時、まじめに行なわない。

以上の事が守れないことは実に恥ずかしいことだが、そのため、ボールがなくなるとかネットの網が破れるということがおきたと思う。だから野球部は、練習試合チームでしかなく、最も活躍しなかったクラブの筆頭にあげられてもしかたがない。来年こそ、五稜中野球部の名が市内に響き渡ると思うが、前にあげたことを今の二年生部員も大いに反省し来年こそがんばってほしい。（渡利　三郎）

応援部

ぼくたち応援部は、正式にできあがってから日も浅く、まだ改良しなければならない所もあるが、それでも、ぼくらはりっぱな応援部といいきることができる。一年生の時は、ただ大きい声を出し、スキーの時使う小旗をふり、しぐさも他校からからかわれるくらい幼稚なものだった。でも今は違う。応援部という独立したクラブで、自分たちの作った「しぐさ」で、りっぱな応援旗もあり、いかす白い手ぶくろをはき、これ以上望むこともないくらいに、りっぱな応援部となった。でもこのくらいになるにはほんとうに苦労した。前に他校にからかわれたことを思いだし、ばんかいしてやろう、すこしでもりっぱな応援にしようとみんなで、昼ごはんもたべずに相談し、帰りは六時ごろが普通だった。

ほんとうに、想像以上に、大仕事だった。でも、苦あれば楽ありで、全市の中学校生徒の前で、いばって応援合戦をできるようになった。ぼくは、応援している時、涙がでるほど力がはいる。これは、応援部でも、苦労した人でなくてはわからないと思う。

ぼくは、応援部の本当の意味を、深くあじわったような気がする。ぼくたち三年生が卒

業しても在校生が、実際に応援部の意味を知り、もっともっとりっぱな応援部にすることを心から望みたい気持ちです。（黒川　力）

体操クラブ

体操部が開設されてから三年目、全学年はじめてそろう年である。新装の体育館で、秋の日ざしが長く窓から差し込む中で、僕達は一生懸命に練習にはげんで来たのだ。体操部のおきては「自主練成」である。部員それぞれ考え、工夫をこらして演技をし、助け合うのだ。阿部顧問先生の激励と御指導。特にそのユーモラスな言動は、僕達体操部員の緊張を適度にやわらげてくれた。このやわらかさの中でのびのびと育ったのだ。

秋の中体連に参加する僕達は、五稜中学の伝統を、母校の歴史の第一頁をどのように飾るか、後輩のための礎としての価値ある態度はどうあるべきか。そうだ「自主練成」の結果を「正々堂々」と表現することである。「個人の自主」はチームワークの中に生かされるものである。「優勝」それは、なんと快いひびきを持った言葉であろうか。しかし、僕達はそれ自体が目的ではない。よりよい五稜中学校体操部の輝かしい未来を創造するために奮闘するようだ。想いは旧中央校舎の暗い一隅で呱々の声を上げてから早くも三年。晴れがましい大会にも二年生として初めて参加した昨年の事。今年は全学年がそろい、小粒でも一人前になって闘うのだ。マンモス学校古い歴史を持った学校等々、どの学校を見ても「五稜中学」より大きいのだ。相手にとって不足はない。幸い、ホームグランドだ、敢闘するぞ……。と部員は互いに胸の中に闘志をもやし続けた。

各学校の選手の演技は皆スバラシイ。僕達は少しばかり不安な気持ちになっていった。だが、それぞれ演技を展開しているうちに、不思議と心が落ち着いてきた。「アッ、ミスしたな。」と自覚する余裕が出たのだ。二日間の長い演技が終了した。発表。「総合第一位、五稜中学」。「ワァー優勝だ!!」本校の誕生と、喜びも苦しみも共にして生長した僕達は、第一回の輝く卒業生となるのだ。その想い出の年に、その手で体操部の歴史の輝かしい一頁を「優勝」と筆太に書きしるすことが出来たのだ。僕達のあとに続くものに栄光あれ。

「五稜中学校体操部万歳」　（棚池　正治）

庭球クラブ

テニスクラブは今年発足したばかりの新しいクラブです。部員の数も少なく、最初はグランドに白線三本を引いて、新しいラケットと新しいボールを持って楽しく打ち合いました。でも、はじめのうちは思うように打てず三回ぐらい続けて打つのがせいいっぱいでした。練習時間のほとんどを球ひろいに使うしまつで、グランドをかけ回りましたが、それでも部員はへこたれることなく、元気にラケットをふり回し練習にはげみました。そのうちに腕の方もだんだん上達し、ぼく達は白線三本と壁打ちだけではものたりなくなってきました。

ところが、ある父兄がボール、二コート分を寄付してくれるというのでみんなで相談しネットも用意してコート二面を作り、本格的な練習に入ることができました。そしてぼくたちには、ボールがネットの上を越えて相手のコートに入るのを見ると、からだ全体にファイトがわいてくるほどになりました。だんだん練習が進むにつれて、ぼく達は試合のやり方や、サーブの方法などもおぼえ、組を作って試合をやり始めましたが、やがてわれわれの耳にテニスの中体連があるという情報が入り先生にお願いして出場させてもらいました。

結果は敗戦に終わりましたが、内容は団体戦優勝の中央と二対一、個人戦はベスト8に

残るなど決して悪いものではありませんでした。やはりこれも日頃の部員の熱心な練習の成果だと思います。来年は是非とも優勝を勝ちとるよう頑張ってもらいたいと思います。ぼく達もテニスを一生の友とし、卒業後も度々おとずれ、後輩のみなさんのめんどうをみていきたいと考えております。（藪下　明）

卓球クラブ

男　子

選手は昨年のメンバーから近藤（信）が抜けて新たに長谷川、臼淵が加わり、第一線は全部三年生で固めた。数々の練習試合を経ていよいよ大会を目の前にした時は、全員一丸となって戦い抜く自信はあった。強敵は的場光成、湯川、中央、大川の五校、練習試合ではその大半に苦杯を喫してはいるが、一戦毎にこれも倒せる。あそこにも今度は勝ってみせると、選手の意気込みは最高にたかまってきていた。我が方には絶対といったエースがない代わり、一人が倒れても二人負けても最後までねばり抜いて逆転してみせる執念があった。これは予選リーグで旭を5—0、船見を4—1、港を5—0と軽く撃破し、決勝トーナメント第一戦で大川を3—1と降して、いよいよ準決勝で光成と相対した時、見事奇跡的逆転劇を演じて、その真価を発揮してくれた。個人戦で見事な技術を誇る相手に善戦一番麓、二番近藤共に玉砕、続くダブルス、川井、臼淵ファイナルの熱戦の末、やっと一勝してから掛村、長谷川の奮戦すさまじく、遂に3—2で決勝に進出したのである。

女　子

シングルスは小笠原、田辺、小島、倉の三年生。ダブルス寺山、福井の二年生で固めて男子同様エースなくも団結のチーム。予選リーグで光成、新川、松川を降し、決勝トーナメントは中央を3—0、湯川を3—1で破って、決勝戦的場に1—3と退く。華々しかったのはダブルス六戦全勝の奮闘である。

男子決勝戦、急性ジンマシンをかくしての臼淵の苦戦は痛々しく、前日の逆転劇は再び見られず、全員刀折れ、矢つきての二位であった。

（麓　正則）

バスケットクラブ

バスケット部、この名をきいてもピンとこない人が多いと思います。しかし、部員の数は少なくても部員には根性がある。それは赤川のバス道路を、一列になって走った春の日一日でもわかる。一人もへこたれずに走ったからだ。最低二十分で往復するのだ。いまなら私はボールを持つと、すぐボードまでドリブルしてショットできるようになった。これもバスケット部にはいってからの習慣になっているのだ。バスケットは足と頭をつかう運動である。また敏捷性も必要である。ボールのところまで自然に走っていけるようでないとよいとはいえない。それにバスケットの練習はつらい。しかし、この練習しだいでじょうずになれるのだと部員は思っている。

私はこの学校を三月に卒業するが、このクラブはよくなるだろう。いまの一年生が三年生になるころは一つの力となっているでしょう。しかし、練習はなまけずにしっかりしていないとよいスポーツマンにはなれないのだ団結してチームワークのよいのがバスケットクラブでなければならない。来年こそクラブの名をあげてください。（高木　厚三）

バドミントンクラブ

現在の状況

われわれバドミントンクラブの生徒で練習にきているのは三十名ぐらいです。それも八月までで、今では全くといっていいくらい練習にきている生徒はいません。

その原因は二つあります。

第一は十月に中体連があってほかのクラブが

出場するためそのクラブ員が練習するために体育館が使用されたこと。

第二はそれからというもの水曜日にはほかのクラブ員は関係の人々が使用してバドミントンはできない状況にあることです。新発足のクラブとして当然ではありますが、このようにいろいろ困難な問題をかかえています。

バドミントンという種目は元来どんな場所でも、どんな人でも気安く楽しむことができるという、とても家庭的なスポーツとしてあらゆるところに広がっています。ですから、私達学校においても、大いに盛んになっていなければならないと思うのです。

こんな意味から今年のバドミントン部発足は非常に大事な意味を持つわけです。用具、その他の関係から今年は十分な活動はあまり望むことは無理ですが、一年後、二年後のため、しっかりとした基礎を築くため、今後はりきって頑張るつもりでいます。（津村雅義）

バレークラブ

『アウト』バックにいた選手の声がひびいた。相手のボールがインドラインをわったのだ。

私達にとって事実上の優勝戦であった潮見中との第三セットを勝ちとったのだ。選手は皆泣いていた。余勢をかって旭中をストレートに破って五稜中は栄ある優勝旗をにぎった我々排球部は一年目にボールだけで発足したネットもコートもなかった。ただルールや、コツを先生に教えてもらうといった具合でした。二年目にやっとネットとコートが出来て中体連の出場がきまった時、皆は声をあげて喜んだ。一回戦で男、女敗退。二年目女子優勝。男子は的場と大接戦の末、惜しくも敗れましたが、「排球五稜」の名前を全市にとどろかせました。

バレーの試合

現在、部員も七十名近い人数がいますが、残念なことに男子部員の数が少ないのです。しかし、この問題も近いうちに解決すると思います。

体力を養い、スポーツマンシップを身につけるということをモットーにしている排球部は過去にはいろいろと苦しいこともありましたが、今年はすべての条件もそろって「男女そろって優勝旗をもち帰る」という目標のもとに一同はりきっています。

勝つためには個人個人の技術はいうまでもありませんが、部員全体の気持ちがぴったりしなければならないと思います。特に九名がせまいコートの中でプレーをするのですからチームワークは特に大切です。キャプテンを中心に今後ますます部内を固めて、伝統に恥じないクラブを築きあげていきたいと思っております。（須藤　慶一）

水泳クラブ

水泳部は今年の夏初めて五稜中に発足しました。一年から三年までをあわせて六十余名で結成され、阿部先生が責任者でした。我々水泳部員は多かれ少なかれ水が好きで先生の所に行っては「まだ部会を開かないのか」とよくさいそくしたものです。全市の中学の水泳部で申しあわせ、函南にプールを貸してもらうことになりました。それが決定して水泳部でどんなに喜んだでしょう。約一日おきに二時間の練習。初めてのときは二十五メートル泳ぐことはなかなかできず、これを泳ぎきったときはくたくたでした。それにもかかわらずに、練習日には多数の人が参加していま

した。

八月二十五日には、中体連の水泳大会がありましたが、練習したのにもかかわらず、おせじにもよい成績をとったとは言えませんでした。しかし水泳によって我々が何かを学び取るということが大事だと思います。

来年は、中体連でも活躍したい。しかし、それよりも生徒のみなさんが多数この水泳部に入り、何かを学び取ってほしい。そして、だれでもが泳げるようになり、いくらかでも水難をなくしてほしいと思います。そのためにも水泳部の部費を多くしてほしいと学校側にお願いいたします。みなさん、来年こそは水泳部をみなさんの手でりっぱにしていこうではありませんか。

（木村　照）

俳句

夕ぐれや　ねぐらに帰る　からすたち
新雪の　光に映える　新校舎

二年　松野茂見

暖冬に　チューリップの芽　はやいでぬ
いけられし　ねこやなぎの芽　ふくらみぬ

二年　福井ゆみ子

霜焼けの　指に薬をぬる　夜かな
指先きで　曇ったガラスに　英語かく

二年　高橋悦郎

年こしや　なごりおしげに　除夜の鐘
冬の夜　しゅんしゅんやかん　音一つ

二年　越後谷　潔

初雪や　弁当に母の　味かみしめる

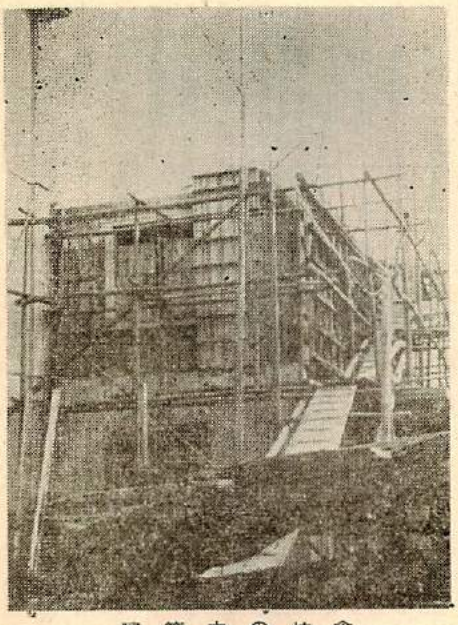
二年　木村光洋

校舎落成特集

五稜中学校の誕生から今日まで

井上　豊

ようやく第三期工事により十二月二十四日検定を終え、理科室、家庭科室が完成し学校側へ引継がれることとなり、第三学期よりその使用が可能になった。実に喜びに堪えぬことです。



建築中の校舎

このあたりで、誕生の頃からの思い出を繰りかえすことにより、今日までのたどった道すじをふりかえることも向後のよいたよりになることと存じ、述べてみたいと思う。

五稜中学も決して快調なすべり出しではなく、すべてに新しいものを作って行く上での生徒、先生、PTA、母の会の一致協力しての抱負は大きなものがあり、如何なる困難にも積極的努力を重ねて行こうとの心意気はあった。

① 田家分校発足当時のこと

三十六年四月六日大川中体育館で田家分教場としての入学式を行ない、大川中に三教室、中央中旧校舎に四教室を間借りし、七学級編成で発足した。

大川、中央両校より格別の理解と厚意により、施設教材、教具等援助をいただいたが、授業面では、先生方の往復に相当時間がかかるので、往復することを出来るだけさけて、同じ教科二時間続きの授業が多く行なわれた。中央校舎と大川校舎との授業は交互の日に行なっておったが、H・R指導の上でその連絡等に随分気をつかったものである。

この悪条件の環境の中でも先生方は週二回教育方策、連絡事項のため会議を持ち、生徒会は代議員、専門委員会の都度役員が中央校舎へ集まって、いろいろの困難を克服して忍耐強く、新校舎の完成するまではと精一杯の努力を続けました。

② 中央旧校舎で七学級併合当時のこと。

七月中旬大川校舎収容の三学級を市教育委員会の諒承を得、PTA委員会ではかり、まとまる運びとなった。通学上距離的にも心配される面もあったが、登校、下校のさそい合い、集団登校で交通事

故等の心配はなかった。遅刻をする者もほとんどないという状況であった。せまい薄暗い二間廊下が集合場であり、遊び場であったが不平もなく、与えられた場所をよりよく工夫して、のびのびと明るく、学習に生活に努力を続けたことが、困難をのり越えることが出来たものと思う。

第一回運動会が九月二十三日（日）思わざる大雨となり、開会式終了と同時に生徒は直ちに帰宅さしたが、PTA役員の方々と先生方は豪雨の中をいとわず始末に懸命であったことも、大きな試練として思い出の種となっている。

九月二十五日は又とない秋晴れの上天気で、五稜郭公園で行なわれたが、競技によっては生徒席が空席になるという工合であったが母の会の協力参加があり、親子揃って競技、演技を楽しむことが出来た。運動会用具も借り物ではとのことで、PTAの特別寄付により大方整えることが出来た。

③ 待望の新校舎へ移転当時のこと。

十二月十五日校舎第一期工事の検定が行なわれた。高圧線通過地域をさけて設計され、ピンクに薄茶の入った明るい校舎。外観の色彩は冬の夕日に映えて私共の感激と喜びを物語っている。普通教室十五、及び衛生室、放送室が出来、十九日新校舎への移転も完了し衛生室は職員室に放送室は衛生室に転用された。

二十一日移転式を行った。その感激と喜びは一層希望と覚悟を増したことであったと思う。しかし、当時は体育館はなく、通し教室が講堂となり、体育の時間使用された。

④ 校名五稜中学となり独立校となったこと。

昭和三十七年四月より一年六学級、二年六学級、計十二学級で、校名も函館市立五稜中学校となり、分校主任の沼山吉之助先生が校長先生に外七名の先生がふえ計先生方は十八名となり、生徒は六百二十一名となりました。

（校名は三十六年十月生徒及びPTA会員の応募した校名をPTAの委員会で慎重審議した結果、全会一致によって決定申請したものでした）

校章は二月六日新入一年生への準備のため校章制定委員会が持たれ、形式を割定し発注したものですが、取りきめまで、その意匠やモチーフで数々の研究が行なわれ菅原先生は特に苦心をされたものです。

⑤ 体育館一期工事、校舎第二期工事完成のこと。

昭和三十七年十二月二十六日体育館一期工事の検定とその電灯施設の検収により、五稜通信三号に紹介のものが出来、二月二十八日体育館落成記念校内球技大会が持たれ、卓球とバトミントンの学級対抗試合が行なわれた。

同年三月二十七日第二期工事の検定により、普通教室四、及び管理部門職員室、事務室、放送室、宿直室、生徒相談室、教材室、用務員室が竣工し、併せて石炭庫、物置を校舎北側に建設。

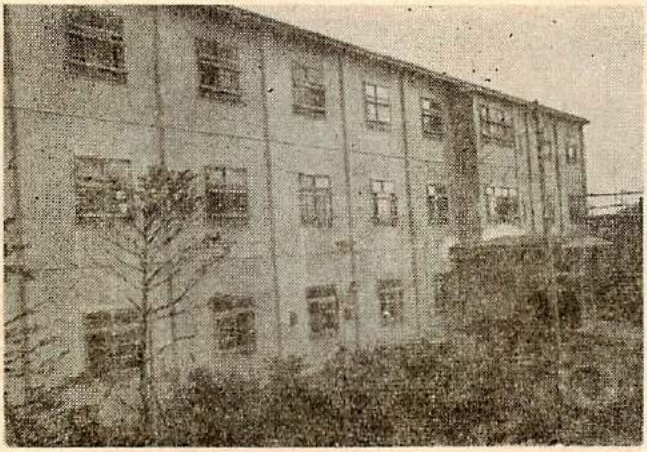
（衛生室を普通教室に、教材室を衛生室、美術準備室に、生徒相談室を図書室に転用）

漸く学校としての機能となる管理部門が出来、不完全形態より完全形態への体裁を整えることが出来た。

⑥ 開校並びに校舎落成記念式のこと。

昭和三十七年十月校舎落成記念事業協賛会が発足し慎重な審議が続けられ、昭和三十八年十月十日記念式典を行なうことが出来た。

これで特別教室及び体育館後半の一部を除いて、ほぼ学校としての体裁を整え、記念事業として、校歌制定、校旗制定、学校要覧作成講堂用幕の調整、校庭の植樹、体育施設の充実と計画が進められ、実現の運びとなったことは、PTA皆様の並々ならぬご尽力の賜物であり、本校教育発展充実のため感謝に堪えぬ次第です。



完成した校舎

以上の経過をふり返って、第三期工事完成の今日。近代的新校舎で、立派な校舎にふさわしい魂をもって、学力に、運動に、生活態度に父母の期待と先生方の信頼にこたえるよう、それぞれに反省して、真に自信を以て誇り得る、自負するものを持てるよう。諸君の困難を乗り越えてきた、がんばりを持って目的達成に歩一歩と進むことを切望してやまない。特に三年諸君、今後の五稜中学校の歴史の一頁をかざる足跡を残し、続く後輩たちが胸をはって自信を持って誇り得るよう校風を築いてほしいものと思う。

38年度学校日誌から

四月　一日　着任した職員
　　土門　先生（的場）　永井　先生（的場）
　　坂牧　先生（中央）　広沢　先生（港）
　　蘇馬　先生（大川）　三十刈先生（大川）
　　竹内　先生（愛宕）　金田　先生（船見）
　　門脇　先生（松川）　荻原　先生（船見）
　　安井　先生（新卒）　鈴木　先生（臨時）
四月　六日　始業式、新任式、入学式、父兄懇談会
四月　八日　修学旅行八時一〇分出発
四月一二日　修学旅行一六時四五分函館帰着
四月一六日　対面式
四月一九日　生徒会選挙管理委員会
四日二〇日　父母と先生の会総会
四月二二～二三日　形態測定

四月二七日　生徒会役員候補立会い演説会
四月二八日　〃　立候補投票
四月三〇日　月例テスト
五月　一日　生徒会役員任命式、三年記念植樹
五月　二日　遠足　一年函館空港、二年トラピスト、三年雁皮平
五月　七日　植樹祭（市役所西側広場）生徒会正副会長出席
五月一〇日　クラブ活動各部編成
五月一一日　安全会加入取りまとめ
五月一三日　健康診断（三年女子）
五月一四日　〃　（三年男子）生ワク投与一・二年
　　五稜郭博物館「室町時代の文化」見学
五月一五日　ツ反応接種
五月一六日　ツ反応接種及び内科検診
五月一七～一八日　ツ反検診、耳鼻科検診
　　家庭訪問週間（一三～一八）
五月二二日　中間テスト
五月二五日　クラブ活動予算会
五月二八日　運動会第一次綜合練習
五月三〇日　〃　第二次〃
六月　二日　開校並びに校舎落成記念大運動会
六月五～六日　歯牙検診
六月一一日　眼科検診
六月一四日　月例テスト
六月一八日　知能検査　一年全員
六月一九日　レントゲン間接撮影（一年）
六月二〇日　〃　（三年・二年・一年の残り）
六月二六日　学力調査（国語、数学、英語）
六月二七日　〃　（社会、理科）
六月二九日　中体連陸上競技大会　第一日
七月　三日　〃　〃　第二日
　　女子優勝（得点三七・五）
　　男子綜合第二位（得点五五・五）
七月　四日　三年臨時父兄会
七月九～一〇日　第一学期　期末テスト
七月一二日　腸パラ予防注射接種
七月一五日　補導委員会
七月一六～一九日　地区別懇談会
七月二一日　全日本放送陸上競技大会（千代ケ岱競技場）
七月二二日　父兄会
七月二三日　校外班地区別集会
七月二四日　第一学期修業式
七月二八日　中学校野球大会　本校対光成
八月　八日　登校日
八月一九日　第二学期始業式
八月二五日　中体連水上競技大会
八月二六日　校内球技大会
八月二七日　月例テスト
九月　三日　校舎第三期工事開始
九月　四日　写生遠足　一年旧桟橋、二年函館公園、三年香雪園
　　トラピスト

九月一一日　校旗入魂式
九月一二日　校旗贈呈式
九月一八日　月例テスト
九月二一日　遠足（一年仁山、二年駒ヶ岳登山、三年大沼）
九月二四日　NHK唱歌コンクール函館予選
九月二九日　中体連野球、卓球、排球、体操
九月三〇日　〃　（体操男子総合優勝）
一〇月　一日　〃　（排球女子優勝、卓球男女共第二位）
一〇月　三日　校内弁論大会予選会
一〇月一〇日　開校記念並びに校舎落成記念式
一〇月一一日　〃　（記念文化祭（展示会、映写会）
一〇月一二日　〃　記念文化祭（弁論大会、音楽会、展示会）
一〇月一九日　市内中学校音楽会
一〇月二三～二四日　中間テスト
一〇月二九日　校内陸上競技大会
一一月　二日　英語祭　公民館ホール
一一月　五日　インフルエンザ予防注射　第一回
五稜郭橋に防犯灯を点灯す
一一月一二日　インフルエンザ予防注射　第二回
一一月一五日　月例テスト
一一月一六日　暖房焚付
一一月二六日　知能テスト（三年）
一一月二九日　指導主事合同学校訪問
一二月三～五日　「素晴らしき跳躍」映画観覧
一二月一三日　市内小・中北部ブロック教育懇談会
一二月一四日　学校表札を瀬戸物製のものに改む
一二月一六日　三年父兄進学相談（個々面接）
～二〇日　一・二年
一二月二三日　父兄会
一二月二四日　第二学期終業式
一二月二七日　消防本部より防火査察

校舎落成記念十月十日の思い出

西谷　富士雄

五稜中学校の校舎落成記念式典も、もう半年前の昔になってしまいました。今日はその思い出として裏話のようなことを述べてみましょう。

十月十日に開校と校舎落成記念式典を挙行し、この日を本校の開校記念日と定め、校旗と校歌を制定し、市内の主な役所や各学校の方々をお招きして校舎を披露するという二重、三重におめでたい日でした。

この式典を行なう計画が立てられたのは一昨年の暮近くのことで校長先生の「校舎さえもない田家分教場に入学して不自由な生活をして今日を迎えた現在の三年生の在校中に是非開校と校舎落成の記念式典を行なって慶びあいたい」との親心と、この計画に早速全面的に賛成して下さったPTAのお父さん、お母さん方の協力で行なわれたものです。計画では、式典の日を本校の開校記念日に定めること、記念の事業として、校旗と校歌を制定して独立した一人前の学校としての形を整えること、校舎ができても周囲が殺風景では気

分が悪いので校庭に植樹すること、まだ体育館が完成しないので、ステージはないけれども記念式典や、第一回卒業式もすぐあるのだからステージ幕を新調しよう。又、グランドができても、戸外の運動設備がないので砂場や鉄棒をつくろうという内容のものでした。そして、何をやるにも先だつものはお金なのでＰＴＡのお父さん、お母さんに積立金のご協力を願うことまども度々の役員会で決定されたのです。やがて、昨年四月、新一年生が入学し、開校してはじめて本校に一年生から三年生までそろうことになり、四月以来何度かの相談の結果、ようやく式典の日も十月十日ときまり、いよいよ実際の準備にかかりました。

まず計画の中で一番頭を痛めたのは何といっても限られた予算の範囲内で、校舎につりあう立派な式典を行なうことでした。くわしく説明しますと、式典をどのようにやるとよいのかということにはじまり、お祝いの品として安くて量が多くて、君等に喜んでもらうようなものは何だろうか、お客さんは何人ぐらいおいで下さるだろうか、記念の文化祭はどのくらいの規模で行なうか、校舎の飾りつけはどのようにするかなど、数えきれないほど沢山の問題がありました。

中でも先生方の最も苦心したは式典当日お客様をどの教室で休んでいただき、生徒の君等の控室を何教室にするかということでした教室は全部で二十教室あり、そのうち、そのうち文化祭の展示室に二階の九教室、来客の控室や式典準備室に一階の六教室をあてると残りは三階の四教室と音楽室が生徒控室になる。つまり一教室当り百八十人もがつめ込まれることになり、持物などどう整理したらよいだろうか。そして、この混雑する三階で三人の先生方はどんな方法で祝餅を君等に間違いなく配れるだろうかと心配すれば限りないしかし、まだ大物があるのです。本校は行事に雨に恵まれる傾向があるので、当日雨が降ると、その混雑さは一層つのることになるので、昇降口にテントを張ることも計画され、式典係の先生は式場の心配がありました。つまり約三百人のお客さんを椅子に腰かけていただくとしたら、生徒は何名はいるだろうか、ステージはどれだけの大きさに特設できるだろうかということで、先生方は毎日この相談をしたあげく、体育館を何回も測ったり、朝会に君等をつめて並べると、どれくらいのすきまがでるか調べたり、実際体育の時間に椅子を三百脚入れてみたり、ござを敷いて二、三学級モデルにすわってもらったり、校長先生の陣頭指揮で廊下までステージの模型をつくってみたりしたものです。そのほかにピアノを三階の音楽室から体育館に下げるのにどうしたらよいかということも心配した一つですが、幸い校舎増築中の山葉建設のおじさん方にたのんでやっと無事に運んでもらい、永井先生もやっと安心して校歌の練習をされたことも思い出されます。

そのほか式場と職員室との連絡ですが、約この間が百五十メートルもありますので、電話の取り次ぎ、先生方との連絡、当日のお客様との連絡に一回一回走って来て用をたすのでは非常に不便なうえに、お客さんが廊下にいらっしゃったり、混雑している所で走るわけにもいかないし、困りぬいたあげく、仮設電話をひいてもらうかインターホンをつけるか研究しましたけれども非常にお金がかかるので、これも困難であり、考えぬいた結果トランシバー（小型の無線通信機）を使うことを思いたち、早速ラジオ屋さんから借りてきて、一昨年の大沼遠足で経験された小川先生と藤原先生にテストし

てもらいましたところ、感度は上々、体育館と事務室の間の連絡の非常にうまくいき「こちら体育館です。事務室応答願います。どうぞ。」という工合で、通信士の技術もなかなか要領がよく大助かりでした。

このような苦労やら心配はどこでもあることなのでしょうが、何事も最初の経験をする本校にとっては大変なことでした。でも幸いPTAの方々、生徒の皆さん、先生方の三者の協力がうまくいき、お客様も満足してお帰りになり、式典も文化祭もみんな大成功に終われてほんとうに嬉しく思っております。

来年の十月十日、再来年の十月十日と開校記念がめぐり来る度に思い出して職員室の話題になることと思います。

最後に本誌を通し、いろいろご協力下された皆様方に心から感謝を申し上げ、拙ない思い出を終わりと致します。

十月十日

三年D組　石川律子

十月十日、本校の記念すべき盛大な校舎落成式記念式典が行なわれました。市内の各学校の校長先生方や、市当局の方々、父兄のみなさんがたくさんおいでになり、今後の五稜中学校の発展についてのお祝いのことばや、強い要望などをお話し下さいました。私達も今までに、ないくらい緊張して、壇上で述べられる祝辞に、じっと耳を傾けて聞いておりました。その様子は、「何事にも負けずにりっぱな五稜中学校にしよう。」とだれの顔も決意にみなぎっていました。そして、この日を祝うかのように立てられてありました。

今日の盛大な式典にあたり、思い出されることは、強い風、どしゃぶりの雨、ゴロゴロと鳴る雷、そのような日に、私達は大川中学校田家分教場に入学しました。

校舎がないので、大川中と中央中に分かれて勉強しました。一学期の授業をしてみましたが、先生方が両方の学校にかけもちするのも大変でしたし、私達の生徒会の活動も不便でした。それで、二学期に中央中学校にいっしょになりました。

秋には五稜郭の公園で運動会をしました。私達一学年だけですから、休みなく競技をしました。父兄の方々もいろいろな競技に出てくれて、とても楽しい運動会でした。

そうしているうちに、校舎は工事が進んで、二学期の終わりには新校舎に移転になりました。あまりに美しい校舎に感嘆の声が、あちこちにとんでいました。新しい二重窓、タイルの床、明るい壁など、すべてが暖かく私達を迎えてくれました。このりっぱな校舎で勉強や運動のできることに感激しました。

二年生になってから学校の名前を父兄の方々から募集してつけていただきました。ここに初めて五稜中学校が誕生しました。その年に、函館一のりっぱな、体育館も半分ですが出来、その記念に、冬の球技大会などが行なわれ、力を競い合いました。

そしてこの体育館で、新入生を迎え、一・二・三年生と全学年がそろい、校舎も着々と完成に近づいて、名実ともに、りっぱな五稜中学校になりました。

今年は、市内の中学校といっしょにいろいろな、行事に参加しました。中でも運動方面では、すばらしい成績を上げて、市内の中学校に五稜中学校を認識してもらいました。

そして、落成記念式典のお祝いをかねて、文化祭が行なわれました。これで三回目の文化祭ではありますが、過去二回の文化祭は、中学校として、全学年そろわなかったせいか、出品作も少なく、さびしかったが、今年は、全学年もそろったし、各クラブの人数が多くなり、クラブの活躍が目立ちました。運動クラブの会場には、中体連で獲得した、数々の優勝カップやトロフイなどたくさん並べられ、その功績をたたえていました。

このようないろいろな思い出を残して、私達が五稜中学校第一回卒業生として巣立つ日も、間近になりました。

私達は、先輩がいないために、よその中学校の生徒と違い、自分たちで五稜中学校のりっぱな伝統を作らなければならないのでが、思うように出来なかったことを反省しております。たとえば、生徒会の三役の選び方は、今年度は三年生だけで組織されましたけれども、活動してみて、二年生を入れないでやると、三年生が卒業した後で、活動がわからなくてとまどうようなことがあると思いますから、これからは、選挙の時には必ず二年生も入れてやった方がよいと思います。

私達は第一回目の生徒ですから不自由な教材もありましたが、後輩は、年々設備が整いますから、教訓の自主勉励や、友愛協調に基づいて、りっぱな五稜中学校生徒となることを望みます。私達も、五稜中学校の卒業生として恥じない人になります。

短歌

二年　神　健治

宿題の短歌作れば夜ふけて
　蛍光燈のしらじらしさよ

冬の夜ひえびえとした
　部屋の壁弟の影大きく移る

二年　白木貴子

故郷の思い出話なつかしく
　家族そろって語り合う夜

朝早く窓ごしに見る山々の
　朝日にかがやく白金の色

卒業生特集 ①

楽しかったこと

★詩

五稜郭の秋

三　年　佐々木　仁

泣く虫もなく水だけがさらさらと
遠い昔の夏をしのんでいる。
枯葉が風に舞いおとずれる者もなく
石垣につたがからすでいる。
地上に緑はなく水草だけが青々と
夏の思い出を語っている。
山々は雪をいただいて
松の大木は灰色の空に古戦の秋を眺めている。

詩を書く時

三年E組　倉　寿子

詩を書く時
　私は何かに解放されたような
　　気持になる
詩を書く時
　私の心に大きなやすらぎがある
詩を書く時
何にかもいやな事をわすれることができる
自分の本当の心を書くことができる
　詩の中に自分の不満をぶっつけ
悲しみ
　　そして又ある時は喜びを感じ
詩の中に自分を置き
　詩を書くことによって
　ともに考え、悲しみ
　　思いだしたりする事ができる
詩というものが
　　自分をささえて
　　いてくれるような気がする
ささえていてくれる
　そんな他人にたよるような考えは
　　あまいかもしれない
しかし私の不満を

だれがじょうずに受けとめてくれる
　その人はもういない
だから私は詩を書く
　詩の中に自分の不満を持ちこみ
　そして受けとめてもらう
詩を書く時
　それは私の心が一番
　やすまる時だ。

餞別（はなむけ）

— 先人のことば —

◇人間をよく理解する方法は、たった一つしかない。それは、かれらを判断するのに、けっして急がないことだ。
（サントブーブ　フランスの詩人）

◇事をとげるものは愚直でなければならない。才ばしってはいけない。
（勝海舟　日本の政治家）

◇一つの事件を自分と反対の意見を聞かずに決定する人は、かれの意見が正当であったにせよ、正当とは考えられない。
（セネカ　ローマの哲学者）

◇多くのことをなすはやすく、一事を長く持続するはかたし。
（ジョンソン　イギリスの詩人）

◇ものごとを正しく見るのは、たった一つのやりかたしかない。ものごとの全体を見ることだ。
（ラスキン　イギリスの思想家）

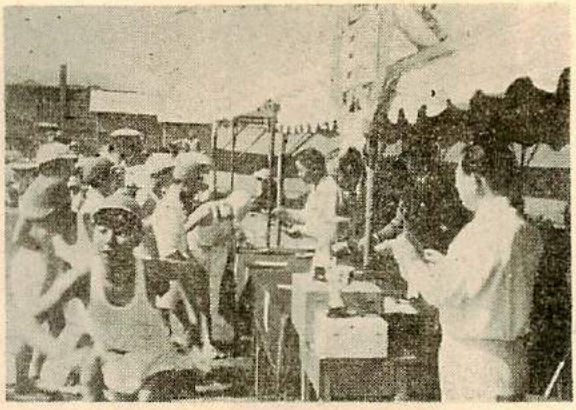
運動会

三年F組　石川京子

前の日まで降っていた雨も三学年そろったのを祝ってか、からりと晴れ上がり、ぜっこうの運動会日和となった。その日の一番目の競技が私達の百米だった。いつもなら、とおに心臓がドキドキやっているところなのに今年はなぜか、いつもになく落ち着いていた。「用意」の号令がかかり、すさまじいピストルの音、ほとんどみんな同時にスタートした。運よくじゃんけんで一コースになったものの、賞に入るみこみは遠い雲のかなたの夢にすぎないのだ。

どうやら真ん中ころから一人とび出したらしい。どんどん進んでいった。ところがおもいがけないことに、次に続いているのが私ではないか。ターンの所までくると、向うから六人の仲間がいもをころがすように走って来た。そこで私はむこう側の一位の人とほとんどすれすれでゴールインした。気がついてみると、私は三位の座にすわっていた。私にとって二位であろうが、三位だろうが大差はないのだ。だが賞に入ったという感激で胸がいっぱいだった。とにかく中学生になって初めてだからである。席についてからも、しばらくはこの興奮はさめなかった。この競技で私は走ることにおいて少し自信をもった。そして体のどこからともなく、まるでポパイがほうれん草を食べて、もりもり力が出てくるような、そんな物が体中をおおって次の競技が待ちどおしくさえ感じられた。

一年生、二年生、三年生の男子の競技が次から次へとくりひろげられ、私達の二番目の競技『ぱくときみは同級生』の番がやって来た。今度はさっきのようにはいかなかった。



運動会風景

昼は家にかえらず、おばあちゃんに昼御飯を持って来てもらって律ちゃんとテントの中で食べた。でも、ちっともゆっくり食べているひまがなかった。すぐ次にはじまるオリンピックアワーの準備があるからだ。私達のクラスでもどこの国をやったらよいか、いろいろと考えたすえロシアをやることになった。そしてカチューシャとその相手の男とコザック、ロケット、ガガーリン、チトフなどを出すことに決めた。が、困ったのがそれらの服をどうするかということだった。それでもどうやらこうやら、ととのえ、準備は運動会の前の日までかかったのである。

仮装の準備は運動場で各クラスが一緒にやることになっていた。運動場にはそれぞれのクラスが工夫したいろいろなものがおかれた中で私はカチューシャの服装にとりかえ、小さな花たばをもった。相手の男役は村岡さんだった。男子から学生服をかり、それに金紙で肩や胸に飾りをつけ、立派な軍服を着た彼女は、初めて見る人は男子とまちがえてもおかしくないほどだった。いよいよ出発だ。先頭にガガーリン、チトフが宇宙旅行の絵を描いた大きなカンバンを持って歩き、次にロケット、コザックと続き、最後に私と村岡さんが仲よくうでをくんでグランドを二周した。そのあと本当ならば、行列が中央に集まってクーベルタンが宣言するはずが、行列の先頭が帰ってしまったため、だれもいないところでモーニングを着てひげをつけたクーベルタンが何やら宣言したらしい。とにかく、ない知恵をしぼり苦労した仮装も、あっけなく終わってしまった。

午後からは「一、二、三年生がそろいました」という競技で、一年の男の子をふんづけてしまったりして、どうやら今年の運動会は私にとって大事な思い出の一つになりそうだ。

修学旅行記から

三年D組　田中久美子

「ガタン」と障子のしまったような音で目がさめた。まだねむい目をこすりながら上を見ると、きれいな天じょうが見える。「ああそうだっけ。ここは旅館だったっけ。」と思うと、きのうのことをぼんやりと思い出してきた。

松坂屋デパートへ行った時のこと、A子さんは妹に買うおみやげをさがしていた。私も隣の子供に買うおみやげをさがしていたので一緒にさがすことにした。おもちゃ売り場などを何回となくまわっ

修学旅行（東京浅草にて）

て歩いたら、ガラスケースの中にままごとに使う、ろうでできたくだものや、野菜が小さなお皿に入って売っていた。「いいものがあった。」と言って、そっちの方へ行って見ると、五つくらいずつ入って十五円と書いてあった。私たちは、てっきり一皿十五円だと思い、これは適当だと思って、五皿くらい買って行こうときめた。そして、A子さんと店員さんに言ったら、「それ一こで十五円なんですよ。一皿じゃないんですよ。」といわれ、びっくりするやら、恥ずかしいやらで逃げだしてきたり、また、ままごとのお茶わんや、お皿などがナイロンの袋に入って白い札に五十八と値段のように書いてあったので、A子さんは、「これ、ほんとうに五十八円ですか」って店員さんにきいたら、「それは百七十円ですよ。」と笑いながら言ったので、また恥ずかしくなって逃げだしたりした一日。

それに、きのうの朝、なにか腰に重いものが「ドン」とのっかかったような気持ちで目がさめた。ひょいと隣りを見ると、B子さんがいない。「おやっ」と思ってあたりを見廻すと、私の足のほうのすみっこに横になっているのが見えた。そしてその足は、私の腰の上にのっかっていたので、大声をだして笑ったりしたことなどがだんだんはっきりとしてきた。しかし、まだねむい。皆もねむいらしいとみえて、「ムニャムニャ」いっている。と、隣りの室がさわがしい。C子さんに時間を聞くと、（私は旅行にくるときに、時計をわすれてきましたので）「まだ、五時四十分だよ。」と言った。私は「どうして隣りの室あんなにさわがしいの。」ってきくと、「さっき阿部先生がおこしにきたんだよ。しらなかった。」と言った。「ああ、そういえば、さっき障子をしめるような音がしたっけ。」と思いながら起きると皆も目をこすりこすり出かける用意をした。

東京タワーから見た東京全景

三年D組　神崎逸子

「わあー」私はためいきをつきながら、目をキョロキョロさせるばかりだった。世界一のタワーと言われるほどあって、あれほど巨大なビルもここから見ると、マッチ箱のように小さく、高くそびえ立っていたあの工場のえんとつも、上から見ると貧弱な棒にしか見えなかった。

ひろびろとした飛行場の滑走路も、小さなグランドにしか見えない。東京名物交通地獄も一目に見えるようにはっきり見えた。東京の心臓国会議事堂も家々の間から姿を見せていた。

春のひざしをあびた東京の街に夕日が沈み始めた。後楽園球場の照明もつき、遠くにくっきりと写しだすようだ。夕日に色どられた大東京——なんと美しいことだろう。

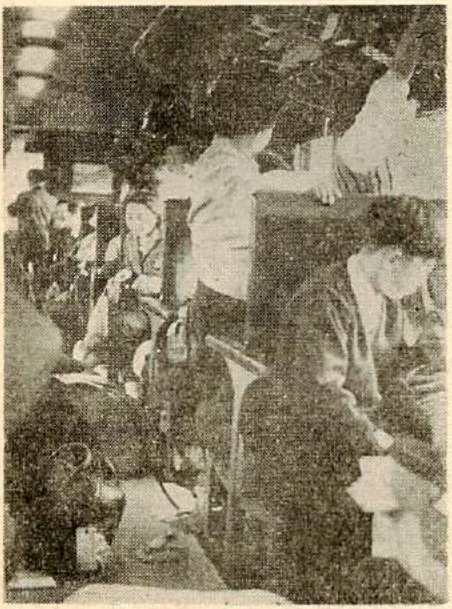
普通は山にかくれるはずの太陽がだんだんと雲のあいだにかくれるのであった。オレンジ色の雲が紫色の雲に変わり、そして東京の街に灯がついた。やがて、この空は昼間とばかり輝く。ネオンの明かりを浴び、青白い色をつけるだろう。そして一千万人の人が休まる時、ネオンが消え始め、星が輝くだろう。私はもう一度東京全景を見た。

見学コースの最後の東京タワーも数分で去らなければならないがいつかまたこのタワーに登った時、東京の街も変わっているかもしれない。

修学旅行『汽車の中』

三年F組　須藤慶一

午後一時、ぼくたちは北海道と本州とを結ぶただ一つのこの巨大な連絡船から下船した。「ホッ」とする間もなく、後ろから先生の声。「急がないと汽車に乗れないぞ!」ぼくたちは走った。両手に大きな荷物を持って階段を登ったり、降りたり、うしろからこれを見ると、とてもこっけいだった。ようやく全員汽車にのった。「あーあ、つかれたな。」こんな声が、あちこちから飛び出す。はじめて連絡船に乗った人がたくさんいるらしく、船よいでまだふらふらしている人も大勢いる。しかし、中には船よいなんかなんのその



修学旅行中の車内風景

といった顔つきで、さっそく昼食を食べだすものもいる。

ガタン！いきなり、からだに、ガクンと軽いショックが来た。汽車が動き出したのである。さあ、これから東京へ向かって二十三時間の列車旅行が始まるのだと思うと、未知の世界へ入って行くような気がして胸がドキドキしてくる。空、山、家、畑と窓の外の景色はたえまなく変わって行く。汽車に乗ってから二時間、このころになると、そろそろみなおちついてくる。そして車内はしだいに活気をおびてくる。今はもう希望に胸がいっぱいで何をしても楽しくなるのだろう。キャッキャッとどこのグループからも明るくはずんだ笑い声が聞こえてくる。今、ぼくは、この汽車がどこまでも止まらずに行ってもいいような気がする。

夜の十一時、もう汽車の窓からはなにも見えない。車内はもうさわぐ者はだれ一人としていない。とその時、A君のイビキ声が車内のしずけさを破ってグーッグーとひびいた。すると、まだおきていた数人がこれを聞き、こらえきれずに、あちこちでゲラゲラと笑い出した。びっくりしてとびおきたA君はキョトン！としている。そのしぐさがまたおもしろいので再び大笑い。こんな場面がときどき見られた。

十二時ころにもなると、もう話し声ひとつ聞こえない。大きなイビキ声をたてても、もうだれも笑わない。そんなころ、先生はねむい目をこすりながら車内を見歩く。寝そうの悪いのはなおし、みんながぐっすり寝ていると安心して自分の席にもどって行く。もう真夜中である。

朝七時、こんな時間になると、もうたいていの人は朝食をすましている。そして、車内がぐっとにぎやかになってくる。それにつられて、便所もだいぶにぎやかになってくる。食べるからには、出すのはあたり前。要領の悪い人はずっと後まで、便所の前に立っていなければならない。一通りみんながかよったころ、ぼくは、ゆうゆうと便所へ向かって、車内のせまい通路を通って行くものであった。

九時三十五分、ぼくたちは日光へ到着、ここで下車して日光見物である。しかし、この日、日光はすごい濃霧におおわれていて、湖の湖岸でさえも見ることができなかった。ここで昼食をとり、見えないながらも、いろいろな所を見学した。日光での計画が終わり、再びもとの汽車の所へもどってきた。なんだか今、この汽車を見ると、古巣へもどってきたように感じる。

そろそろみんなもつかれてきたのか、席についても、また前のように騒ごうとするものがいなくなった。しかし、やはり中には少しヘソが曲がっていて、駅につくたびに、何かを買い、いつも口を動かしているというシロモノもいた。

六時、長い長い汽車の旅が終わって終着駅上野についた。みなさっきのつかれきった表情はどこへやら、東京という大都会を前に緊張した顔になっていた。

これから四日間、ぼくたちは第一回修学旅行生として、はじることのないような態度をとらなければならないのだ。　The end

卒業生特集 ②
先生のことば

祝卒業

石塚孝成

水が沸騰しようとする時
その表面はかえって平静になる時がある。
この時熱を加えようではないか
水は矢張り煮えたぎりたがっているのだから
冬が過ぎて春が訪れようとする時
風雪はかえってきびしく荒れる時がある。
この時後へ進もうではないか
春の日はもう門口まで来ているのだから

碁でも将棋でも習い覚えて練習しているとしよう。初めはある程度までどんどん上手になって行くが、ある所でさっぱり手が上がらず停滞してしまうことがある。こんな時、周囲の誰かがちょっと指導を加えてやるとか、あるいは自分で熱心に研究するとかして停滞の原因を打開することによって、又一段と上手になる時がある。

昔の諺に「楽あれば苦あり、苦あれば楽あり。」というのがあるふだん楽ばかりしていると、最後には苦しまねばならぬということである。ふだんに楽をして勉強してないと、試験の時には苦労をする。ひいては入学試験の時にも苦しまねばならない。……と。

これに反し、ふだんからそれ相応の努力を積んでいれば、あわてることもないし、すべてよい結果を得るものです。「終わりよければ、すべてよし。」など、ともいわれるように。

みんなもやがて職について働くわけですが、誰しも成功したいと思い、努力するでしょう。しかし、いろいろな難関がその前に立ちふさがる時があるのです。こんな時、へこたれたり、引っこんでしまってはいけません。目的が達成するまでいろいろと考え、努力し前進を考えようではありませんか。成功のよろこびの前には苦労があるものです。

美しい虹を

平沼靖雄

君もとうとう卒業だね。
毎日試験に追いかけられ、逃げることもできず、世の中は天文学的数学が横行しているというのに、二けたにもならぬ点数が磐石の重みでのしかかり、身動きもならず、先生の冷たい目、父母のぐち、友だちのさぐり合うような顔が夢まで現われるような三年間。よくもまあ、がまんできたね。その生活ともお別れになるわけだ。ほんとによかったね。

現実はきびしいとか冷たいとか、矛盾だらけだとかよく言われるが、君が経験した三年間は多分その現実とかいうものなんだろう。

しかし、現実とは単にそういうだけのものではなく、もっと手におえない奴なんだ。姿も見せず、影もなく、人間が生きている限りつきまとう、陰のような奴なんだ。避けようとすればするほど、鋭いきばをむいて、かみついてくるいやな奴なんだ。そして人間なんて虫けらほどにも思っていない連中で、よく人を見て、こいつは弱いやつだと思うとすぐ歯をむき出してかみついてくる図々しい奴なんだ。だから決して弱みを見せてはいけない。絶対に背を向けてはいけない。逆にこちらから向かって行くんだ。ぶつかって行くんだ。すると奴は案外もろいところがあり、すぐ未来という夢のような、つかみどころのない奴にバトンを渡すふりをするんだね。だから油断をしてはいけない。思わぬ時に、コテンとやられることがある。こいつにやられたら人間廃業しかなくなるんだからね。だからやられそうになっても、絶対、最後まであきらめるな。人生は常に、こいつとの戦いなんだ。ところが、ふしぎなことに、この戦いに、今まで君たちを苦しめたこいつが、過去という名前をもって、君の味方になるという、まるで忍者のような奴なんだ。だから君の態度いかんによって奴を君の味方にできるということをよく知ってもらいたい。そしてこいつが君の背後で太陽のように輝き、前途に美しい虹をかけることを期待する。

さあ、もう君は卒業。これからどうする？思いっきり遊んでみるか、思いっきりやりたいことをやってみるか。そしてその後に何が残るか試してみるんだね。その後に、満たされぬ、空虚なものが君の心を支配しなければ、君は幸せな人だ。せっかくの君の卒業に、何もお祝いをあげることもできず、甚だ残念だがこれも現実という奴なんだ。

わたしの人生観

菅原昭一

たいへんばかげたことかもしれない。けれども、われわれがこの世に生をうけたことが果たしてしあわせであったかどうかということを、わたしは考えずにはいられない。ことし一年をふりかえってみても、けっしておもしろいことばかりではなかった。むしろ苦しかったこと、せつなかったこと、くやしかったこと、悲しかったこと、淋しかったことの方が多かったのではないだろうか。小さい頃母と喧嘩して「なぜ、ぼくを生んだんだ、たのみもしないのに……」と、全くひどいことをいってしまったことを思い出す。そして、この感情は長いこと、少なくも青春に別れを告げるまで、真実としてわたしの心の中にはあった。いまだって、そんな気持ちが全くなくなったわけではないが、考え方は大部かわった。しあわせは決して天から降ってくるものでも、地から沸いてくるものでもなく、自ら生み出すものではないかということだ。生きるということは確かに苦しいことだ。試験とか、就職とか、つぎからつぎと大小の壁につきあたり、障碍物競走のようなものだ。けれども、その壁に全力をあげてぶっつかり、よしのぼり、乗りこえたときの喜びは全くすばらしいものだ。いのちがけの登山は、よき一例かもしれない。いまは、生きることそのことが最高の趣味となれるような、生活の一つ一つが自己に最高の満足を覚えさせるような境地にまで自らを高めていければと思う。

卒業生特集 ③

思い出

中学校生活三年の思い出

三年A組　又坂常人

この三年間の学校生活をふり返ってみて思うことは、ただ「楽しい」の一語につきる。三年間の中で一番楽しかったのは一年の時だった。

一年の時のクラスは、割合と仲がよい方だったのだが、一部にクラスの規律を乱す者がいて困った。それをなくするのに非常に苦心したが、それでもまた楽しみの多い時でもあった。一年の後期に生徒会役員の選挙があったのだが、みんなから推薦され、気が進まないままに立候補してしまった。どうせ落選さと思っていたら意外にも当選してしまった。初めての経験だったのでなかなか思うように生徒会が運営できず、代議員会なども相当混乱したものだった。

その年の十二月に初めて全市中学校生徒協議会に五稜中の代表として、森君達と一緒に出席した。他校の代表はみな三年生の大きな生徒ばかりきていたのに、僕達は一年生だけで、なんだか圧倒され差をつけられたような気持ちだった。その会議の席上にお菓子がでたのだが、他校の生徒はだれも手をつけないのに僕達だけはどんどん食べた。会議が終わって司会者が「どうか皆さん、食べて下さい」といった時には、もう何もなかった。どうもぐあいが悪くて困った。多分よその生徒は、礼儀しらずの食いしんぼうだと思ったことだろう。

そしてやがて三学期になり新しい校舎に移った。初めて校舎を見た時はずいぶんりっぱに見え、かべに手をつけるのもなんだかもったいないような気がしたものだった。やがて三学期もすぎ二年になって組替えをした。初めて顔合わせをした時はなんだか虫の好かないやつばかりだなあと思った。だが、日がたつにつれて、だんだんみんなの人柄がわかってきて、いいやつばかりだなあと思うようになった。

さて、二年生の時は何もしないうちにどんどん時が過ぎ、とうとう三年生になってしまった。

三年生のうちで一番楽しかったのは、やはり修学旅行である。修学旅行でも一番思い出になったのは、上野公園である。上野公園にいった時に、外人がたくさんいたので、よせばいいのに外人相手に英会話の練習をしようと考えた。それでさっそく四人連れの外人に話しかけた。もちろん英語でである。「貴方とお話をしたいのですが」「ええ、喜んで」仲々調子がよい。続けて「日本にきたのは初めてですか」「いいえ……」僕はその外人たちを観光客だと思ったのだが、どうやらちがうらしい。ぼくはてっきり「イエス」の答を予想していた。なぜかといえば英会話の本にはたいてい「イエス」と書いてあるからだ。ところがそこを「ノウ」といわれたので、すっかりタイミングがずれ「ノウ」の次がさっぱり解らなかった。それで二、三回聞き返したのだが、気が転倒してさっぱり解らなかった。そのうちにその外人達はむこうにいってしまった。竜頭蛇尾と

はこのことである。とんだ恥じをかいてしまった。でも生まれて初めて外人と会話をしたので、まあまあいいだろう。それでも「ユースピーク　グッド　イングリッシュ」といわれていい気になったものだ。

やがて運動会もおわり、二学期の文化祭も終わり、とうとう卒業も目の前にせまってしまった。だが、なんといっても、楽しい、そして有意義な三年間の学校生活であった。

思　い　出

三年D組　富　山　恵　子

五稜中学校第一回卒業生として、卒業を眼前に迎え、生徒の一員としてこの三年間を回顧し、私の今後への希望を述べてみたいと思います。

雪の晴れたあの日、九ヵ月間、大川、中央の両校に分かれて分校生活を送った私たちは、待望の新校舎へと移転した。四月には新一年生を迎え、五稜中学校として開校したあの喜びを、わすれることはできないだろう。不自由だった分校での生活も、今ではよき思い出の一つである。一、二、三年がようやくそろった今、私たちは、社会の縮図ともいうべき義務教育をおえようとしている。この三年間のいろいろな思い出が、一つ一つよみがえってきます。

行事面から考えると、まず三大行事の一つ「運動会」。全員でグランドの石を拾い、整ったグランドで、五月晴れの青空に向かって抜いたり抜かれたり、元気いっぱい走ったり、又、昼食後、なれぬ手つきでおどったフォークダンス。恥ずかしく、下を向きっぱなしだった友達。後半をかざるリレーの応援をする声が、グランドいっぱいに響きわたり、最後の楽しかった運動会が、今でも記憶に新しい。

第二に「文化祭」。一年に一度総合的に発表されるだけあって、各クラブはたいへんな熱の入れようだった。テープやリボンで飾られた陳列場には、美術クラブを始め、各クラブの傑作がずらりと並べられた。中でも社会クラブのわら作り、いや、ささ作りの家は父兄の方にも喜ばれ、みんなの足をくぎづけにしてしまいました。

第三の行事、卒業式を目の前にひかえ、私たちは、就職、進学と母校の名誉と後輩の向上のため、努力しています。さて、私たちは良い生徒だったでしょうか？中学校教育の基礎の上に立って、自分自身をよく見つめ、これからのけわしい道を進んで行きたいと思います。中体連でのバレー、卓球、体操、その他のクラブの、あの輝かしい優勝旗を、本校に持って来ることが出来たのも、良い成績を残すことが出来たのも、一人一人の努力のたまものだと思います。

後に残るみなさん。これから、まだまだ伸びる五稜中のよき礎、よき伝統を残して下さい。よい伝統とは、日日の努力の実績の上に出来るのだと思います。あなたがたの日日の生活が、よりよい努力の実績の連続であるように、やがて五稜中学校が、他の学校に誇れる伝統を得ることが出来るよう、私たちの植えた木のように、常に前進を続けて下さい。詩人高村光太郎先生の「道程」の一節〝ぼくの前に道はない。ぼくの後に道はできる〟このことばのように、あなたがたに与えられた道程を、たゆまず、着実に踏み入ることにより、よい人間を確保し、しいては自分のため、後輩のため、五稜中学のよき礎が出来るのです。

五稜中がいつまでも、いつまでも開校以来変わらぬ姿であるように、きれいな校舎であるように祈念いたします。

卒業をむかえて

三年D組・杉　村　誠一郎

大きな夢と希望に胸をふくらませ、出来たばかりのこの五稜中学校に入学してから、はや三年の月日が流れ、私達は学校と共に勉強し、又学校と一しょに育って来ました。今では、五稜中学校はりっぱな独立校として全市に名を轟かせ、私達は第一回卒業生として、すぐそこに卒業をひかえております。

過去三年間をふり返ってみると、数多くの楽しかった事、辛かった事が今はなつかしく思い出されます。

中でも特に強く心に残っている事は他校の生徒には、経験する事の出来なかった事、それは分校からの独立、開校の喜びでした。

昭和三十六年四月、当時の五稜中は、大川中学校田家分教場と銘打って、私達が入学するのと同時に、発足した市内唯一の分校でした。その時は校舎もなく、中央中の旧校舎に四学級、大川中に三学級の間借り生活でした。そのために、先生方は、両校往復の授業をし不便な毎日を送らなければなりませんでした。

そうして八月、先生方の努力が実り、中央校舎に校舎統一が出来私達は初めて会う仲間達をむかえ入れたのでした。

そのうちに十月も過ぎ、冬が近づいて来ると、穴だらけの旧校舎では、風通しが良すぎてストーブの回り以外は北極のようでした。しかし、そんな寒さもつかの間、十二月十五日、夢にまでみた、待望の新校舎が完成、私達は暖かいりっぱな校舎で冬を過ごすことが出来ました。新校舎は全くすばらしく、それまでの黒い壁は白壁に雨もりのする天井は防音式の天井に、そして揺れる床は、アスタイルに、実際、私達は天国にでも来たような感じでした。そうして二十一日に移転式を持ち、感激を新たにしました。

発足後一年、昭和三十七年四月一日、一、二年生計六百人で、市立五稜中学校と校名も新たに独立開校しました。平和を示す桜花に本校の象徴である五稜郭をあしらったものを校章とし、全市にその名を知られる事になりました。

昭和三十八年十月十五日、開校記念及び校舎落成記念式典を盛大に開き、生徒父兄共々喜びをわかちあいました。

さて、もう一つの忘れられないものとなっている事は、楽しかった修学旅行でした。わずか五日間の短い期間ではありましたが、一生の思い出となる事がギッシリつまっていました。中でも東京タワーでアメリカ人と話した数分間が忘れられません。友達と二人で歩いている所を「ハロー。」とか言って呼び止められて、いろいろ聞かれたが、全然わからなかった。又自分等が言った事も通じなかったらしいが、一応、話したというだけで、忘れられない事となっています。

この三年間、私達は何もなかった分教場に、諸先生方、父母の良き御指導のもとに、生徒会、クラブ活動など学校の基礎を築いてまいりました。それだけにこの三年間は、平凡ではなく、喜びあり、苦しみありの変化に富んだ有意義な生活だったと思います。

何でも第一回から始まった私達の中学校生活も第一回卒業で終わろうとしています。

在校生の皆さん、校歌にもうたわれているように、勉強にスポーツに大いなる力を伸ばし、この五稜中を理想の姿に築くために一致協力し、努力される事を願い、この五稜中が益々発展成長し、栄えある事を心から祈ります。

卒業に当たって

三年E組　佐藤英子

中学生活にもあと二ヵ月余りで別れなければならなくなった。母によりそい、ちょっぴり不安な気持ちをいだいて仮校舎である、大川中学の門をくぐって早や三年が過ぎようとしている。三年間、その長いようで短かかった年月の間に、ずいぶんたくさんの事があった。

一年の時は、半分は大川に、半分は中央中の旧校舎に別れて勉強しなければならなかった。それでも初めのうちは、教科、教科の先生が変わるのが珍しく、数学の先生はどんな先生かしら、国語の先生はどうかしらと、一時間、一時間すぎて行くのがとてもたのしみだった。テスト用紙の書きこみ方も、小学校の時とはだいぶ変わっていて、初めはちょっととまどったが、毎月行なわれるテストには大いにファイトを燃やしてぶつかっていった。しかし、のびのびとはねをのばして遊べる運動場もなく、大川の生徒に遠慮がちだったのが、今でも印象にのこっている。

両校に時間で通われる先生方もどんなに御苦労なされたことかと思います。でも、その年の?月、私達は中央の旧校舎に、皆そろって勉強することができるようになり、そして?月には待望の新校舎に移転することができた。初めて見る新校舎は、りっぱな建物で美しいと思った。私は、口には言い表わせないほど嬉しく、自分達はこのりっぱな学校の上級生になり、又、第一回目の卒業生になるのだとほこりに思った。

二年生になる時、組替えが行なわれた。仲よくなった友達と別れるのがつらかった。新しく変わった人たちも、皆よい人たちばかりだった。下級生もできた。小規模だけれども文化祭も行なわれた。六月には自分たちのグランドで盛大な運動会をすることもできた。そして今は、下級生も一、二年とそろい、運動会、文化祭など、どこの学校にも負けない、りっぱなことができるようになり、私も、いよいよ三年生になった。

この年は中学最後の最大の思い出となろう修学旅行があった。函館を立つ時、五色のテープがみだれとび、ちょっぴり感傷的になった。日光では残念ながら小雨が降り、最も期待していた華厳の滝を見ることができなかったのが心残りだった。しかし、東照宮が思った以上に美しくよかった。東京では何もかもがめずらしく、おどろく事ばかりであった。卒業後も忘れることなく、楽しい思いでとして残ることだろう。

そうしているうちに、夏休みも近づき、高校入試のことが大きくクローズアップされてきた。「高校進学狭き門」などと書かれた新聞などを見ると、胸がドキドキしてくる。上級生がいないのですごしたせいか、全般にのんきにすごしてきたが、今は最後の追いこみで、皆一生懸命頑張っている。今年は運動のクラブがすばらしい記録をたてたが、この記録は皆が力を合わせて頑張ったから出来たのだと思う。何事でもすれば出来る。これから学校を受けつぐ、一、

二年生の皆さん、ほこりある五稜中学のために頑張ってください。最後にお世話になった、諸先生方にお礼を申し上げると共に永久に幸あれと祈りながら筆をおきます。

思い出

三年F組　水島満枝

私が田家分教場に入学してから月日はこまの回るごとく三年を過ぎました。

たしか入学した日は雷が鳴り雨がものすごくふっていました。校名も校舎もなく、大川中学校で入学式をあげ、次の日からは中央旧校舎と大川中との二つに別れ、間貸り生活の中でも明るく育った私達は第一期工事が終わった、小さいけれども三階建の立派な校舎を見て、みんな感嘆の声をあげました。

ようやく自分達の校舎ができた。今まで教室のすみずみに紙をはって風を防いだり、雨もりがしていた校舎から見るとホテルのようなすばらしさ、あの時のうれしさはだれも忘れることのできない一こまではなかったでしょうか。そして今では「函館市立五稜中学校と九百人あまりを収容する立派な独立校です。校舎も第三期工事が終わり、また真新しい体育館でおもう存分あばれています。三学期からは待望の家庭科教室も使えるとあってとても楽しみです。今日にいたるまでたくさんの行事がありました。運動会、遠足、文化祭校舎落成記念式、そして三年生にとって一番の楽しみだった修学旅行と、まだまだたくさんありました。

校舎落成式の時、五稜の校歌をみんなで歌った時はとてもうれしくて声がふるえていました。今まで校歌もなかった、我々にとって金糸で縫われた校旗をみながら歌うことはとてもうれしいことでした。

今日ではほとんど不自由しない日々をおくっています。でもこの春には私達はもう卒業という時がきました。私にはこの三年間がとても短く感じました。ふり返ってみるとなんでもが楽しい日だったように思います。

初めは不自由な校舎に住んでいたとはいえ、今では新しい学校に良い先生がた、良い友に囲まれてとても幸わせです。だから、もっと学校にいたいと思うがそうはいきません。

まず、第一回の卒業生としてりっぱな校風を残していきたいと思います。私はこの五稜中が函館で一番新しくりっぱであるとともに勉強も一番であると言われるようにみんなで頑張っていかねばならないと思います。植樹祭の時にうえた木が少しずつ成長するように五稜中学も一日一日成長していくことと思います。

卒業生特集 ④

卒業生住所録

三年A組

笠井澄生	函館市白鳥町	
金村熙康	〃	田家町
河合孝一	〃	大川町
北市邦敏	〃	八幡町
川設良平	〃	五稜郭町
工藤登喜雄	〃	〃
黒川力	〃	〃
小林雄二	〃	田家町
佳吉謙二郎	〃	五稜郭町
瀬戸徳広	〃	〃
副島隆	〃	田家町
高橋明	〃	五稜郭町
田中義雄	〃	〃
長谷栄同	〃	〃
中村徹	〃	柳町
野口晴雄	〃	五稜郭町
能登真理	〃	田家町
藤井雅憲	〃	柏木町
藪下明	〃	田家町
吉井孝一	〃	宮前町
吉田友久	〃	八幡町
真狩正志	〃	柳町
又坂常人	〃	五稜郭町
宮城勉	〃	〃
宮田恒夫	〃	田家町
高野みち子	〃	〃
若狭谷茂夫	〃	白鳥町
有坂春樹	〃	田家町
瀬尾正	〃	中島町
青山純子	〃	五稜郭町
尾崎美代子	〃	宮前町
影浦由美子	〃	〃
掛端秀子	〃	〃
川島芳子	〃	田家町
岸田ヒロ子	〃	〃
金子正子	〃	五稜郭町
木村照	〃	柳町
熊谷信子	〃	白鳥町
工藤恵美子	〃	宮前町
古坂京子	〃	田家町
斎藤真佐子	〃	〃
下山信子	〃	〃
鈴木真由子	〃	〃

津里洋子　〃　五稜郭町
中村光子　〃　宮前町
野々宮京子　〃　田家町
浜田則子　〃　五稜郭町
牧野恵美子　〃　〃
山崎貞子　〃　田家町
渡辺久美子　〃　五稜郭町
渡辺静子　〃　〃

三年B組

四十川修二　函館市柳町
網代徳雄　〃　田家町
東　達美　〃　五稜郭町
岩上栄治　〃　〃
臼淵茂　〃　〃
内手進　〃　田家町四
小田晴久　〃　柳町
河井明吉　〃　五稜郭町
木村次男　〃　田家町
国分育雄　〃　白鳥町
近藤潔　〃　八幡町
斎藤茂　〃　〃
鹿野泉　〃　五稜郭町
柴田敏明　〃　田家町

高橋俊郎　〃　八幡町
高谷幸吉　〃　〃
田原行雄　〃　田家町
津村雅義　〃　宮前町
中村明男　〃　五稜郭町
浜地正治　〃　柳町
日野口俊行　〃　田家町
福田耕二　〃　〃
藤原喜悦　〃　五稜郭町
三上正義　〃　白鳥町
山田　彰　亀田町本通り
吉田正己　函館市五稜郭町
青山啓子　〃　〃
阿部法子　〃　八幡町
池田千恵子　〃　五稜郭町
泉谷由紀子　〃　〃
一戸美幸　〃　宮前町
乙川絹子　〃　幸町
川崎雅子　〃　宮前町
酒井幸子　〃　五稜郭町
笹本ミチ　〃　〃
高島栄子　〃　〃
高山紀代美　〃　〃
武田多恵子　〃　〃
竹中恵子　〃　田家町

谷岡真知子　〃　五稜郭町
辻　由紀子　亀田町本通り
中野和子　函館市五稜郭町
西田いつ子　亀田町本通り
野呂耕子　函館市白鳥町
松本貴美子　〃　五稜郭町
山本泰子　〃　田家町
吉川夕起子　〃　五稜郭町
四ッ柳陽子　〃　杉並町
若山光子　〃　五稜郭町
鈴木真由美　〃　柳町

三年C組

安藤義孝　函館市八幡町
石沢進　〃　五稜郭町
稲谷孝司　〃　〃
表良一　〃　〃
掛村一憲　〃　白鳥町
菊地敏秀　〃　五稜郭町
久保隆志　〃　〃
小玉哲夫　〃　宮前町
今野元司　〃　田家町
佐川昭　〃　五稜郭町
杉本均　〃　白鳥町
高橋登志男　〃　五稜郭町

寺内慶人　〃　田家町
中村健治　〃　八幡町
西村正志　〃　柳町七の
長谷久司　〃　五稜郭町
畑沢正　〃　田家町
増子徹　〃　宮前町
諸井敏郎　〃　五稜郭町
柳町道雄　〃　〃
工藤正雄　〃　白鳥町
山崎恒男　〃　五稜郭町
渡利三郎　〃　田家町
出村得二　〃　宮前町
佐藤俊昭　〃　五稜郭町
荒谷光子　〃　田家町
石田洋子　〃　五稜郭町
稲田和枝　〃　田家町
石附幸子　〃　白鳥町
岩田千恵子　〃　五稜郭町
及川和恵　〃　〃
大内則子　〃　〃
小笠原美幸　〃　白鳥町
奥田志満子　〃　〃
小野久美子　〃　五稜郭町
加藤恵子　〃　田家町
菊地由理子　〃　白鳥町

佐藤順子　〃　〃
佳吉真理子　〃　五稜郭町
芹田恵美子　〃　〃
外山晴美　〃　〃
馬場和子　〃　田家町道
倉橋恵子　〃　〃
日影館栄美子　〃　五稜郭町
北条幸子　〃　田家町
森富美　〃　五稜郭町
吉田千恵子　〃　宮前町
渡辺保子　亀田町本通り

三年D組

伊藤孝次　函館市田家町
池田雪生　〃　五稜郭町
石塚義人　〃　〃
稲場博明　〃　白鳥町
大川昇　〃　五稜郭町
川井博光　〃　田家町
工藤清治　〃　〃
工藤将幸　〃　白鳥町
後藤喜久　〃　宮前町
笹浪登　〃　五稜郭町
篠原秋夫　〃　〃
菅谷明郎　〃　〃

杉村誠一郎　〃　〃
佳田茂　〃　〃
瀬戸啓三　〃　田家町
寺井康雄　〃　八幡町
中昭成　亀田町字中道
長谷川泰治　函館市五稜郭町
東山崎正　〃　〃
平山恭一　〃　宮前町
旋正則　〃　白鳥町
南川逸夫　〃　宮前町
三崎敏治　〃　田家町
山本敏雄　〃　白鳥町
北村武志　〃　田家町
佐藤和久　〃　〃
石川律子　亀田町字本通り
今泉裕子　函館市五稜郭町
加賀谷博子　〃　〃
神崎逸子　〃　田家町
斎藤和子　〃　白鳥町
笹森信子　〃　〃
島田道子　〃　〃
白木政子　〃　田家町
助石元　〃　五稜郭町
高橋千恵子　〃　五稜郭町
田賀佳子　亀田町字中道二九

田中久美子　函館市五稜郭町
富山恵子　〃　追分町
中川紀子　〃　五稜郭町
鶴田ミカル　〃　〃
筆村勝美　〃　〃
古西悦子　〃　田家町
三浦恵美子　〃　八幡町
南館秀子　〃　五稜郭町
山田みさ子　〃　白鳥町
渡辺春美　〃　〃
川端美由紀　〃　柳町
細川節子　亀田町字中道

三年E組

市川佳成　函館市五稜郭町
伊藤賢治　〃　八幡町
稲垣悟　〃　五稜郭町
今田公平　〃　〃
上坂保則　亀田町字中道
上村純吉　函館市宮前町
遠藤正明　〃　五稜郭町
大村信一　〃　〃
川内秀昭　〃　宮前町
川口仁　〃　白鳥町
川端清司　〃　〃

木村隆治　〃　五稜郭町
小泉光信　亀田町本通り
斎藤彰　函館市八幡町
設楽優治　〃　田家町
清水猛美　〃　白鳥町
高木厚三　〃　田家町
武野道夫　〃　五稜郭町
棚池正治　〃　柳町
千葉公　〃　白鳥町
鶴賀谷清　〃　柳町
外崎明　〃　五稜郭町
板東均　〃　大縄町
本多孝光　〃　五稜郭町
宮田繁夫　〃　田家町
渡辺芳丈　〃　白鳥町
米田保　〃　五稜郭町
石川光世　〃　田家町
長内栄子　〃　五稜郭町
笠井啓子　〃　柳町
門口八重子　〃　白鳥町
神山敏子　亀田町本通り
木村節子　函館市時任町
倉寿子　〃　白鳥町
小島ひとみ　〃　柳町
小林洋子　〃　五稜郭町

佐々木　清佐子　〃　柳町
佐藤　英子　〃　白鳥町
島崎　ツタエ　〃　五稜郭町
高田　常子　上磯郡木古内町
高橋　愛子　亀田町本通り
田辺　千代美　函館市白鳥町
塚田　ふさ　〃　田家町
出村　美久子　〃　宮前町
中村　ユミ子　〃　〃
浜田　邦子　〃　田家町
原田　富子　〃　〃
樋口　久美子　〃　白鳥町
藤本　るみ子　〃　日吉町
前田　敏子　〃　田家町
松宮　章子　〃　五稜郭町
滝本　ヨシ子　〃　〃

三年F組

上野　純一　函館市田家町
猪俣　健一　〃　〃
角田　広光　〃　〃
葛西　修　〃　五稜郭町
工藤　治　〃　八幡町
熊谷　一英　〃　梁川町
近藤　信一　〃　白鳥町

近藤　通正　〃　五稜郭町
佐々木　勝美　〃　〃
佐々木　仁　〃　〃
島村　登　〃　田家町
下田　博　〃　宮前町
新城　薫　〃　五稜郭町
須藤　慶一　〃　田家町
高沢　孝義　〃　〃
武子　裕一　〃　五稜郭町
中村　考一　亀田町本通り
西沢　収　函館市五稜郭町
野上　良　〃　〃
花岡　英俊　〃　〃
藤沢　建二　〃　〃
藤田　真司　〃　〃
細川　康平　〃　〃
松本　信義　〃　〃
三浦　孝　〃　田家町
南　博美　〃　〃
山内　武　〃　白鳥町
阿部　涼子　〃　五稜郭町
石川　京子　〃　田家町
大竹　美子　亀田町本通り
及川　由美子　函館市五稜郭町
葛城　ひろ子　〃　〃

阪本	ふみ子	〃 白鳥町
佐藤	順子	〃 五稜郭町
佐藤	勢津子	〃 田家町
白井	富美子	〃 宮前町
末武	由紀子	〃 五稜郭町
滝谷	徳子	〃 八幡町
田堰	光子	〃 田家町
内藤	摩利子	亀田町本通り
中村	和香子	〃
中本	あや子	函館市八幡町
西野	邦子	〃 田家町
西村	静子	〃 柳町
星	安代	〃 宮前町
三浦	公子	〃 白鳥町
水木	くに子	〃 五稜郭町
水島	満枝	〃 〃
村岡	千鶴子	〃 八幡町
村上	躍子	〃 田家町
工藤	セツ子	〃 五稜郭町

職員一覧

担任	教科	住所
沼山吉之助 校長		栞川町
井上豊	数学	〃
西谷富士雄 三A	社会	〃
永谷嘉一 三B	英語	〃
菅原昭一 三C	美術	千代ケ岱町
松井喜一 三D	技術	谷地頭町
石塚孝成 三E	理科	白鳥町
平沼靖雄 三F	国語	湯の川町三丁目
阿部光房	保体	五稜郭町
広沢博正	数学	松川町
成田恭子	家庭	堀川町
藤原孝一 二A	数学	海岸町
野々村正晴 二B	英語	千代ケ岱町
小川智博 二C	保体	松蔭町
薄馬辰郎 二D	英語	深堀町
土門厚 二E	数学	谷地頭町
竹内巌太郎 二F	社会	深堀町
笠井敬一 二G	社会	本町
坂牧達夫	理科	人見町
荻原ハル	保体	谷地頭町
桜井恭子	音楽	柏木町
三十刈智一 一A	社会	千代ケ岱町一三五
永井太郎 一B	音楽	中島町
千葉和術 一C	理科	松蔭町
安井孝 一D	美術	千代ケ岱町
金田豊秀 一E	国語	田家町
窪田曄子 一F	〃	〃
門脇初代	英語	亀田郡亀田町本町
吉田ヤエ	養護	松川町
奥寺明	事務官	上磯町字飯生町
髙田美代	〃	蓬莱町
庄司三郎	用務員	田家町
荒谷ミワ	〃	港町
杉村つや	〃	亀田町字富岡
沖野喜久雄	〃	〃
岩崎一男	〃	万代町
藪下明	〃	〃
		港町
		船見町
		田家町

生徒会誌「五稜」の三号をお届けいたします。記念すべき第一回の卒業生を送る特集を中心に編集したため、他の記事を大幅にカットしなければならなかったのは残念でした。

又、流行作家の多いためか、原稿がなかなか集まらず苦労いたしました。お忙しい中を、心のこもった文章をお寄せ下さった多数の方々に深くお礼申しあげ、卒業していく皆さんが、時々これをひらいて、母校をしのんでいただくよう、心からお願いいたします。

なお、表紙は菅原先生にデザインしてもらいました。その他、文章をお寄せいただきました諸先生に、この欄をかりてあつくお礼申しあげます。

五　稜　第三号

昭和三十九年三月九日　印刷
昭和三十九年三月十日　発行

編　集　函館市立五稜中学校
電話③三四五八
発行生　徒　会
印　刷　KK三塚印刷所
電話②七三九〇